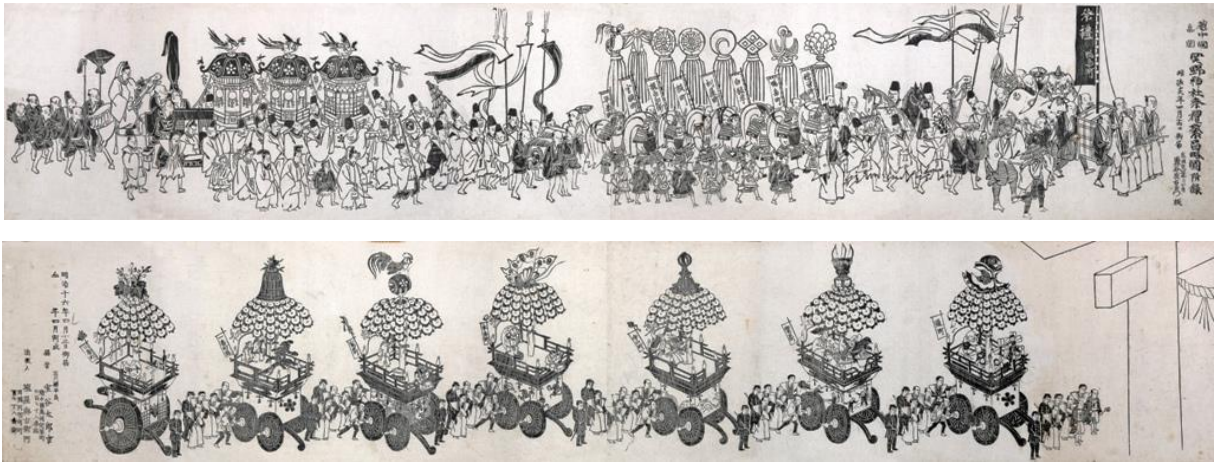


## 第2章 高岡の歴史的風致の維持及び向上に関する方針

### 1 高岡の維持及び向上すべき歴史的風致

#### (1) 商人のまちと祭礼行事に見る歴史的風致



越中国高岡 関野神社祭礼繁昌略図付録（明治16年（1883））高岡市立博物館蔵

高岡城下を町立てした加賀藩2代藩主・前田利長は、父・利家が豊臣秀吉から拝領し、自らが受け継いだ鳳輦の車と御所車の車輪を城下の町民に与えたと言われている。これが現在、重要有形・無形民俗文化財の指定を受け、「山・鉾・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録された我が国を代表する山車行事の高岡御車山（高岡御車山祭の御車山行事）である。その由緒について、はっきりと記すものはほとんど残っていないが、利長が高岡城在城時（慶長14年～19年（1609～1614））に側近の士に対して宛てた御車山文書（市指定文化財）には、製作の許可と完成した山車の出来に対する賞詞が述べられており、その由緒の一端を知ることができる。以来400年間、御車山は山町町民らにより大切に守り継がれてきた。

高岡御車山祭は、利長を祀った高岡関野神社の春季例大祭行事として行われる。関野神社は熊野社及び加久彌社、稻荷社が合祀された由緒ある神社で、拝殿奥に鎮座する各社の建造物は、享保年間や文化年間に修理された記録が残り、建築様式や構造材の年代から近世初頭若しくはそれ以前に建てられたものとされる。



関野神社

行事は、未だ寒さの厳しい1月25日の高岡御車山保存会総会から始まる。総会は関野神社で行われ、町の代表者たちが集まり、厳粛な雰囲気の中、その年の代表となる年番町と年番代表が決められる。

祭礼執行の体制が決まり、2月頃からは花傘づくりが始まる。花傘は御車山には欠かせないものである。赤・白・黄の三色の菊花が付けられた大枝が傘状に組まれた姿は、重厚な御車山を一層華やかなものに見せている。花傘づくりは女性の仕事と決まっており、女性たちは町ごとに決められた場所に集まり、時には世間話をしながらコツコツと花を作る。



保存会総会



花傘づくり

4月3日には与四兵衛祭が行われる。津幡屋与四兵衛は、放生津で御車山と類似の山車が作られたことに対し命をかけて異義を唱え、牢中で獄死した傑人で、御車山の歴史を語る上で欠かせない人物である。この日ばかりは、役員全員が紋服を着用し、関野神社境内にある小さな祠前で与四兵衛を祀り、5月1日に祭礼を行うことを奉告し手打ちを行う。



与四兵衛祭

北陸の長い冬も終わり陽光が燦と輝く4月の終わり、祭礼前日の30日に宵祭を迎える。宵祭の舞台となる山宿は、神を迎える御旅所と言われており、安永5年(1776)には町奉行から「山宿は賑やかにして不敬にならないように」というお触れが出るほど選ばれたものにとっては大仕事であり、一世一代の光栄なことであった。昔から山宿を勤める家は、町内で転入や慶事があつた家などが選ばれており、その家では畳や戸・障子の取替えを行い、一家心して準備を行っていた。現在、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている山町筋では、毎年、伝統的建造物の修理事業を実施しているが、近年では、この山宿を迎えるために家の修理を行う者もいるほどである。



宵祭その1

山宿では、まず本座・相座の人形が幔幕と金屏風を背景に飾り付けられる。その後、町内の者が参列し、神官によるお祓いと人形への御霊移しがなされる。御霊移しが終わるとお酒や餅が振舞われることになっている。



宵祭その2



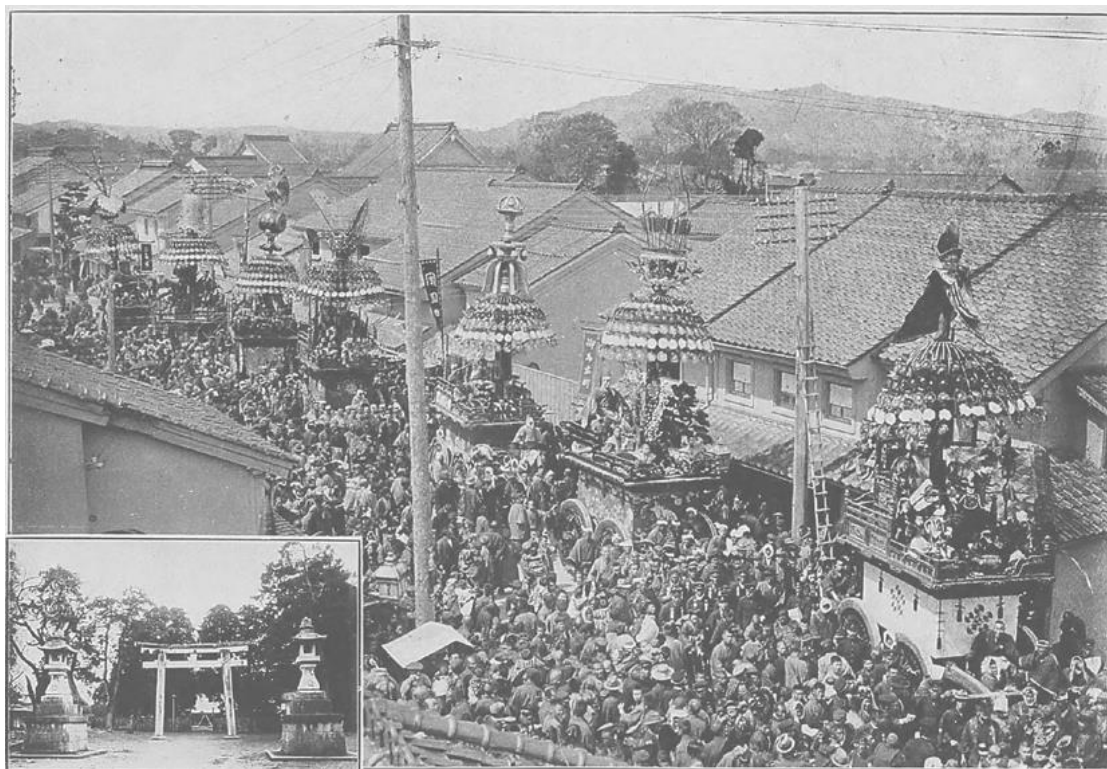
御車山祭山宿

宵祭から一夜明けると祭礼当日である。当日は、ピンと張り詰めた空気の中、朝早くから山宿前で山車が組み立てられ、飾り付けられる。その後修祓が行われ、町内を曳き回し、午前11時に坂下町で曳き揃えすることとなっている。一同揃った後、手打ち式が行われ、山車は坂下町の坂を上っていくのだが、これは、利長在世中、城内三の丸まで曳き登った古例に因むものだとも言われている。

その後、片原町十字路で市長の出迎え、勢揃い式が行われる。これは、かつてこの地が御貸家（町奉行の居宅）であり、代々の町奉行が御車山を観覧した名残で行われるものである。なお、御車山は高岡市民のみならず、周辺地域の人々にとっても古くから大きな興味の対象となっており、勢揃い式には、市内外から道路を埋め尽くさんばかりの大勢の観客が集まり、御車山の形姿に見入っている。



勢揃い式



高岡市山車 『富山県写真帖』富山県編（明治42年（1909））より

御車山の山車は、金工技術や漆工技術など高岡の誇る伝統工芸技術の粋を集めたものといわれ、多くの名工の技術が施された逸品に彩られている。車輪は、木地に鮮やかな漆が塗られ、その上に桐や菊、加賀藩の家紋である剣梅鉢、竜などの文様の彫金金具が施されている。

地山を飾る幔幕は、精巧な織物生地に優れた染色が施されたもので、濃青色や朱色などの生地上に、仙境図や春秋舞楽の図など様々な図柄が施されており、目にも鮮やかなものである。飾山を飾る高欄や後屏には優れた漆工が施されている。高岡漆器は、開町後まもなく膳やお盆、箆笥、鏡台などの製作がはじまり、幕末から明治期にかけて勇助塗や鏝絵、青貝塗などの独創的な技法が確立され、漆器産地としての基盤が築かれた。特に通町の後屏は、高岡漆器の祖・辻丹楓の作と伝わるもので、孔雀や牡



木舟町車輪



御馬出町幔幕

丹、青海波などの優れた彫刻の上に、鮮やかな朱塗り漆と灰墨による古味が施された白眉である。その他のものも、それぞれが名工の作と伝えられるもので、漆の色味や金箔が鮮やかである。この他にも、微細な彫り物が成された長押や幕押さえなどの金具、人形衣装など、山車を着飾る意匠は見尽きることがない。勢揃い式に訪れた観客達は、「私はあの山車が好きだ」、「あの山車の幔幕が一番きれいだ」などと、7基の山車を見比べながら勢揃いを楽しんでいる。



通町後屏

勢揃い式が終わると、山車は一台一台向きを変え順に動き出す。観客たちは、曳き手たちの息のあった動きと、その技に感心し大きな歓声をあげる。

その後、午後6時の関野神社での曳き別れまで、裃と一文字傘に威儀を正した山役員が先頭を歩き、半纏に白足袋姿の曳き手が曳く山車の後ろを興味深そうについて回る大勢の観客たちとともに、山車は所定のルートを巡行する。この巡行路は開町来ほとんど変更がなく、各所に様々なエピソードが残されている。途中で博労町通りへわざわざ引き入れられ極楽寺へ拝礼されるのは、同寺が浄土宗でありながら熊野神も祀っているためともいわれる。また、利屋町では御車山の折り返しがなされるが、これはこの地に津幡屋与四兵衛旧宅があり、そこで神楽を奏するためである。その他にも、特別に功績があった家の前や山役員宅前では、所望と称して神楽が奏せられる。



山町筋を巡行する御車山



山町筋の町並み（木舟町）



山町筋の町並み（守山町）

そして、何といても御車山の巡行が最も映えるのは、平成 12 年（2000）に「伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの」として重要伝統的建造物群保存地区に選定された山町筋での巡行の様子である。元和元年（1615）の一国一城令による高岡城の廃城後、利常の施策や町民の努力により商工業の道を歩んだ高岡において、ここ山町筋は、当時の主要官道である旧北陸道が通る地で、縮綿市場や米商会所が置かれ、明治以降になると銀行が次々と建てられた高岡で最も栄えた地で、主に土蔵造の民家からなる商家町である。この土蔵造民家は、明治 33 年（1900）に高岡で大火があり、その際に当時の県令で新築の際には防火を主眼とした建物を建てるのが義務付けられたことに起因するもので、防火を主眼に建てられてはいるが、山町商人の財力と先進的な文化性の結果、意匠的にも優れたものが多い。



大正初期の山町筋



小馬出町（昭和元年（1926））飯野馨子氏提供

代表的なものとしては、明治33年(1900)の大火直後に建てられた重要文化財菅野家住宅がある。菅野家は、北前船による交易や金融、紡績などで財を成した高岡でも有数の名家で、主屋は、切妻造・平入・2階建・黒漆喰仕上げの豪壮な建物で、意匠的にも優れ、両袖のレンガの防火壁や有事の際に引かれる鉄板張りの防火戸など防火を意識した工夫がみられる一方、下屋の軒裏に施された鰻絵や、アカンサスを模した鋳物柱など、凝った意匠を随所に見ることができる。さらに、重厚な外観とは対照的に内部は数奇屋風の造りとなっており、柱や天井板の銘木、鮮やかなベンガラ壁など、繊細かつ優れた意匠が施されている。



菅野家住宅

この他にも、富山県指定文化財筏井家住宅や市指定文化財旧室崎家住宅（現高岡市土蔵造のまち資料館）など、大火の直後に建てられた多くの土蔵造民家や、大正3年(1914)建築の擬ルネサンス様式・赤レンガ造・銅板葺建物で、正面玄関の白御影石や二階窓のステンドグラスなどがアクセントとなった富山銀行本店など、往時の山町の繁栄を彷彿とさせる建物が連なっている。

また、山町筋の裏手の通りなどにも土蔵造をはじめとする伝統的な建造物が数多く残されており、祭礼日にはこれらの建物に幕を張り、提灯を吊るして山車の巡行を迎えることとなっている。



山町筋を巡行する御車山

この高岡御車山祭は、利長による町立て以来の高岡の歴史を最も感じることでできる祭礼行事であるが、高岡の町では、高岡御車山祭以外にも町の成立や発展の歴史を物語る祭礼行事が行われている。

木町は、開町にあたり利長が最初に創設した町である。木町は、千保川と小矢部川の合流点に位置し、物資集散の拠点として発展をみせた。この木町では、利長へ報恩感謝を奉げる御書祭が行われている。御書祭は、宝暦2年（1752）に始まったもので、この年、この地域一体が凶作に見舞われた際に加賀藩が8百石の御貸米を仕給してくれたのは、利長のおかげであると感謝し、報恩の祭を行ったのが始まりである。祭礼日は、利長の命日にあたる6月20日に行われることになっており、当日は木町神社拝殿に町民らが参集し、利長から拝領した御親書などを見台に飾り神事が執り行われる。なお、同神社の拝殿は、神明造、銅板葺屋根にかつお木を乗せたものである。

高岡御車山をはじめとする祭礼行事が、由緒ある社寺や近代以降の隆盛を示す町並みを舞台に行われる様子は、商都高岡の積み重ねてきた歴史と伝統、町立て以来受け継がれてきた町民たちの熱い思いを物語っている。



高岡町絵図（明和8年（1771））高岡市立中央図書館蔵



図：商人のまちと祭礼行事に見る歴史的風致

## (2) 利長・利常への報恩感謝と前田家の遺産に見る歴史的風致



八丁道を行く前田利為侯爵夫妻（大正4年（1915））高岡市立博物館提供

高岡の開町来の発展は利長や利常のお陰であると、高岡町民は彼らへの感謝の念を片時も忘れたことがない。その思いは、高岡御車山祭や御書祭などの祭礼行事などにも垣間見えるが、現在のあいの風とやま鉄道線を挟んだ町の南側、瑞龍寺や前田利長墓所（加賀藩主前田家墓所）が残された地域に特に色濃く感じることができる。

北は日本海に面し、東に庄川、西側に小矢部川が流れる高岡にとって、町の南側は唯一陸続きの地であり、防御上の不安があった。利長はこの状況に対応するため、禅宗や真言宗などの浄土真宗以外の寺院を防御上の砦としてこの地に配した。総持寺は瑞龍寺北側にある真言宗の古刹である。境内の観音堂は、天和3年（1683）再興の入母屋造・棧瓦葺・妻入りの正面に向拝を持つもので、臺股の優れた装飾や、組み物などへの極彩色が見事なものである。



総持寺観音堂

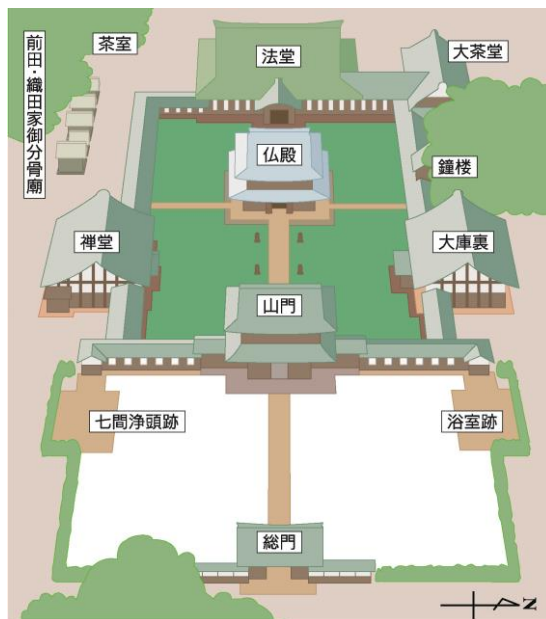
さらに、3代利常は兄・利長の遺徳を弔うために、この地に瑞龍寺と前田利長墓所を建立したが、その際、瑞龍寺も墓所も周囲を濠で囲むなど、防御上のことを意識していたようである。なお、瑞龍寺の周囲には、同寺の建立と同時に東漸院や林洞庵などの塔頭が配され寺町が形成された。

また、瑞龍寺の門前は、高岡の町の中心部から井波方面へと通じる井波道が通っていた地で、人と物が行き来する往来であり、現在でもクランク状に曲がったいわゆる枡形道が残り、脇には開町時に通された庄方用水が流れ、庄方用水沿いには農家の建築様式を残す伝統的な主屋や蔵が並び、瑞龍寺や周辺寺院と一体となって歴史的な空間を形成している。



庄方用水

この地域でも一際目を引く瑞龍寺は、利常が利長の遺徳を偲び、正保2年（1645）頃から造営を開始し、利長の五十回忌にあたる寛文3年（1663）に完成した曹洞宗寺院である。平成9年（1997）には、仏殿・法堂・山門が「それぞれがきわめて優れ完成度が高く、三者が並ぶ配置構成がきわめて均整のとれた美しい比例を示しており、我が国の社会・文化に影響を及ぼした曹洞宗の建築を知る上で特に深い意義を有している（指定理由要旨）」として国宝に指定された。



瑞龍寺伽藍配置図



瑞龍寺伽藍を北東から望む



瑞龍寺山門及び回廊

この瑞龍寺には日々多くの参拝者や観光客が訪れる。彼らは、まず総門の前で七堂伽藍と言われる瑞龍寺の伽藍についての説明を聞く。その後、万治年中（1658～1660）に建てられた三間薬医門形式・切妻造り・柿葺の総門をくぐる。総門をくぐると、眼前には中央に山門、そこから左右に延びる回廊の左側上方に禅堂の屋根が、右側上方に大庫裏の屋根が目飛び込んでくる。山門は、文政3年（1820）に建てられた三間一戸二重門・入母屋造・柿葺建物で、通常の禅宗二重門に比して、下層屋根に対する上層屋根の低減率が低く、雪などによって下層屋根を傷めないための雪国独自の工夫が見られる。山門をくぐり回廊を左へ進むと禅堂がある。



瑞龍寺山門

禅堂は僧侶が座禅修行をするための建物で、寛延元年（1748）再建の切妻造り・柿葺建物である。禅宗寺院にとって禅堂（僧堂）は非常に重要なものであるが、遺構は非常に少なく、京都の東福寺、宇治の万福寺と並び重要文化財に指定されている。回廊を右に進むと大庫裏がある。大庫裏は、相対する禅堂とほぼ同じ規模・意匠の建物である。明治9年（1876）頃一端除却され、同年に向拝のみが芹谷村千光寺（現砺波市）に売却されていたが、昭和・平成の大修理の際に売却の事実が発見されたことから復原されたものである。



瑞龍寺禅堂と回廊

山門から一直線上には仏殿・法堂がある。仏殿は伽藍内で最も見栄えのする建物で、同寺の創建当初から残されているものである。戸室石の基壇上に築かれた方三間裳階付・入母屋造で、最大の特徴として屋根が鉛瓦で葺かれていることが挙げられる。鉛瓦葺の建物は重要文化財では他に金沢城石川門しかなく非常に稀有なものである。また、上層の組物を三手先の詰組とし、扇垂木が整然



瑞龍寺仏殿

と配列され注目に値する。さらには、内部は吹き抜けとされ、組物や海老虹梁・太瓶束などの架構材は複雑ながらも計算され尽しており、その美しさには一見の価値がある。

仏殿からさらにまっすぐ進むと法堂にたどり着く。法堂は寛文3年（1663）建立の入母屋造・銅板葺建物で、桁行11間、梁間10間の大規模な書院造大方丈である。法堂の中央奥室の内陣には利長の位牌が安置されている。



参拝者達は、それぞれの建物の素晴らしさに触れながら、加賀藩のお抱え大工の技術と、利常の兄への思いの深さを知り、利長の位牌に拝み感謝の念を捧げるのである。また、大人たちは、子どもに瑞龍寺の歴史や高岡の成り立ちを語る。こうして、利長や利常への思いが受け継がれていく。この瑞龍寺では、年間を通して様々な行事が行われているが、利長の命日にあたる5月20日には毎年燭光能が行われる。燭光能は、利長の33回忌に利常の命により能が奉納されたことを起源とするもので、以降瑞龍寺は折々に能の舞台となり、昭和59年（1984）に高岡能楽会が法堂を利用し能を開催して以降は、毎年定期的に燭光能が催されることとなった。燭光能は法堂の御所の間で行われる。御所の間には能楽師や観客らが集まり、蝋燭の灯りだけがゆらめく中で能が舞われる。その雰囲気は非常に幽玄なものであり、観客らはその雰囲気に魅せられる。



燭光能

毎年6月1日と7月1日には、法堂の広縁と高廊下でひとつやいとが行われる。元来、ひとつやいととは、瑞龍寺の僧が修行の疲れを癒すために約250年前から行ってきたものだが、明治以降になって、春の農作業が一段落した農民の間にも広がり、疲労が出て神経痛などの起こりやすいこの時期に、農民たちが瑞龍寺を訪れ、膝などにお灸を据えるように



ひとつやいと

なった。ひとつやいとの際は、人々が一列に並び、僧侶たちから順にお灸を受ける。高岡市民は毎年この行事を楽しみにしており、瑞龍寺が高岡町民の心の拠り所となっていることが感じられる。

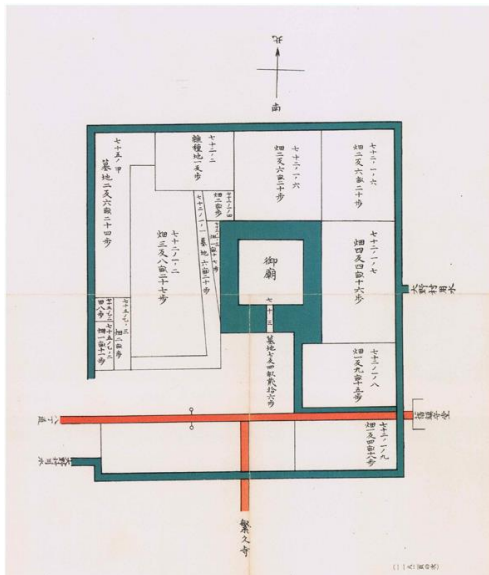
瑞龍寺から、同寺と前田利長墓所を結ぶ参道として作られた八丁道を進むと前田利長墓所にたどり着く。前田利長墓所は、利常が利長の冥福を祈り正保3年（1646）に造営したもので、内区と外区及びそれらを隔てる濠、内区の墓標などからなっている。墓標は笠塔婆型で、戸室石でできた二重基壇上に載せられており、基壇底部から墓標頭部までは11.75mを計る。また、現在墓域は約10,000㎡であるが、当初は約33,000㎡の墓域を二重の濠が取り囲んでおり、大名個人墓としては全国最大級の規模である。



利長墓所の参道（大正期）高岡市立博物館提供



前田利長墓所（墓標と墓壇）



「墓地取拓願付図」(明治42年(1909)『高岡史料』下巻付図) 高岡市立博物館蔵



前田利長墓 『富山県写真帖』富山県編  
(明治42年(1909))より

墓所には日々多くの参拝者が訪れているが、利長の高岡城入城の日にあたる9月13日には前田利長公顕彰祭が挙行される。利長の死後、墓所では毎年利長の命日に前田家や関係者などにより墓前参りが行われていたが、これが高岡市民に受け継がれる形で、昭和30年代から祭事として執り行われることになったようである。

顕彰祭は厳格な一種の儀礼であるが、高岡市民にとっては最も大切な祭事の一つであり、大勢の市民の協力のもと行われている。顕彰祭の一週間前には、まず墓所の清掃活動が行われる。普段墓所は、地元自治会やボランティアなどによって定期的に清掃が行われているが、9月は大抵台風が通りすぎた後で、草木がひどく散乱している。そこで、地元の自治会員やボランティア、近隣の中学校の生徒らが大挙し一丸



利長公顕彰祭

となって清掃活動にあたる。こうして墓所はきれいになり、当日を迎える。顕彰祭当日は、午前9時50分頃になると墓前に前田家当主や関係者、市民らが一堂に会する。その後、午前10時になると導師が入場し、導師による香語や読経、顕彰祭会長による祭文朗読などが厳粛に執り行われる。また、式の途中には瑞龍寺の賛歌「ながれ雲」が披露される。導師が退場し顕彰祭は終わるが、その後も墓所の内区は開放されることとなっている。普段内区は鍵が掛かっており入ることはできないが、この日だけは決められた時間に開放されることになっており、多くの参拝者が訪れ墓前でお参りをする。また、墓所の前にある繁久寺では、大勢の市民の参加のもと茶会が催されており、加賀藩のお茶の文化がこの地でも根付いていることを感じさせる。



図：利長・利常への報恩感謝と前田家の遺産に見る歴史的風致

### (3) 鋳物のまち金屋に見る歴史的風致



金屋町拝領地絵図（享保13年（1728）高森家文書）高岡市立博物館寄託  
※右側半分の薄墨色部分が拝領地

高岡は全国の銅器生産の9割以上のシェアを占める銅器のまちである。

この高岡銅器の象徴が、高岡城跡に程近い場所に鎮座する高岡大仏（市指定文化財：銅像阿弥陀如来坐像）である。高岡大仏は、承久の乱（1221）を避けた摂津国多田の源義勝が二上山麓に1丈6尺の木造大仏を造営したのが始まりと言われる。その後、火災などによる焼失等があったことから、現在の大仏は昭和8年（1933）に造営された4代目で、銅造であり、鋳造から着色までの全工程を高岡銅器職人が行なったものである。

この高岡銅器の技術は、鋳物から発展したものである。高岡の鋳物は、利長が城下の建設にあたって、慶長16年（1611）に、殖産興業を目的に礪波郡の西部金屋から7人の鋳物師を招いたのが始まりとされている。利長は、彼らに長さ100間・幅50間の拝領地を与え、税を免除し、5ヶ所の吹場を建てさせ鋳物をつくらせた。

この町が現在の金屋町である。



高岡大仏



高岡大仏開眼供養会（昭和8年（1933））

この金屋町には、現在もサマノコ（狭間虫籠）と呼ばれる千本格子が特徴的な町家が非常に多く残り歴史的な景観を形成している。金屋町の伝統的な町家は、多くが明治期から大正期にかけて建てられたもので、一般的に切妻造り・平入・2階建・真壁造り建物で、大きな特徴として両袖の袖壁や軒の深さなどが挙げられる。特に、明治期に建てられた古いものは、冬期間の積雪に耐えられるよう登梁形式となっており、階高の低い2階は物置として使用されていた。



金屋町の町並み

鋳物を生業とすることから常に防火に気を配っていたことは、金屋町が高岡のまちの中心部からやや離れた千保川の対岸に配置されたことに象徴されるが、防火の意識は町家の平面形式にも見ることができる。各町家は、主屋、中庭、土蔵、作業場と順に配しており、火災の可能性の高い作業場を奥に置き、さらに万一の際には土蔵の開口部を味噌で目張りし主屋への延焼を防げるようになっている。

高岡鋳物の製作技法は、伝統的な技法である双型鋳造法や焼型鋳造法、一品製作に用いられる蠟型鋳造法、明治期以降の近代に開発された生型鋳造法など様々な手法があるが、その製作に係る流れは、大別すると製図、型作り、鋳造、仕上げ、着色に分類できる。

製図は、鋳物を作り始める前に行われる製作物のデザイン作業である。日用品であれば使いやすさ、装飾品などであれば美しさなどが重視され、発注者がいる場合にはその意向が確実に反映されるよう、墨や筆を用いて詳細な図案が描かれる。

デザイン終了後行われるのが型作りである。木や鉄などを用いた原型を作り、原型を土や砂にうつしとって鋳型が作られる。鋳型が作られた後、鋳造が行われる。鋳造は、金属を溶かす溶解と、溶かした金属を鋳型に流し込む注湯からなる。溶解は、



たたら



鞆（ふいご）

主に明治20年（1887）以前は、送風板を踏んで風を送る“たたら”や、仏具や手あぶりなどの小型銅器の鑄造に用いられた鞆（ふいご）が用いられ、明治20年以降は、技術や設備の近代化の中で生まれた蒸気機関を動力とする炉などが用いられた。

仕上げは、鑄造により作られた鑄物生地を仕上げる作業で、研磨と彫金に分かれる。研磨は鑄物表面を磨き上げるもので、ヤスリや剪を用いてきれいに磨かれる。彫金は、鑄物の表面を鑿で彫ったり叩いたりして模様を作り出す技法である。一般的に彫金は、金属の素地に施されることが主であり、高岡でも江戸時代の末までは板金に施されていたが、鑄物技術の発達と併せて、次第に鑄物へも彫金が施されるようになった。この高岡の彫金技法は加賀象嵌の影響を大きく受けているが、日用品など大量生産品の加工を行っていた高岡では独自の技術も多く生み出され、線象嵌や平象嵌、布目象嵌、高肉象嵌、片切り彫り、鋤出し彫りなど様々な技術が生み出された。

最後の工程が着色である。着色は錆を防ぎ、美しく見せるため、鑄物の表面に色や模様を施す作業である。高岡においては、明治30年（1897）頃から鑄物生産工程から独立して行われるようになった。着色技法は、大別すると塗漆などの物理的方法と、加熱や薬品漬けなどの化学的方法、これらを混合する方法の三種がある。



金屋町界隈（大正初期～戦時中）小嵐明  
氏蔵



新幸橋の波止場（大正初期～戦時中）小  
林明氏蔵



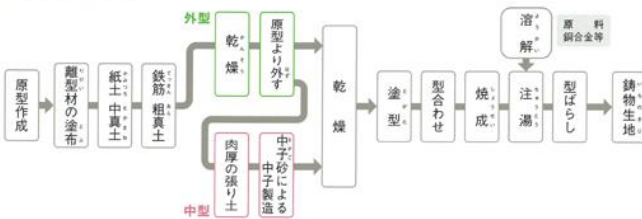
喜多鑄物工場 『富山県写真帖』富山県  
編（明治42年（1909）より

# 焼型 鑄造法

## ■ 焼型鑄造法工程



焼型鑄造法による  
「聖観音像」  
の製作工程



 <b>1 原型</b> 鑄型を分割するための位置に線を入れる	 <b>2 外型作り</b> 寄せ型(複雑な部分は鑄型を分割する)を作る	 <b>3 外型作り</b> 紙の繊維の入った細かい土を原型に薄くつけた後、粗い土をつける	 <b>4 鑄型の補強</b> 湯の圧力で鑄型が壊れないよう鉄筋を入れる
 <b>5 分割された鑄型</b> 寄せ型を組み立て、二つ割りの鑄型にする	 <b>6 うら土張り</b> 製品の肉厚と同じ厚さに粘土を伸ばし、外型の内側に張りつける	 <b>7 中子(中型)作り</b> 中子砂をつめ、乾燥させる	 <b>8 型合わせ</b> 半分ずつ作った中子を合わせ、一つの中子にする
 <b>9 中子(中型)の完成</b> うら土を取り除くと、原型より一回り小さい中子ができる	 <b>10 鑄型の組み立て</b> 外型に中子をおさめ、鑄型を組み立て、針金で補強して溝口をつける	 <b>11 焼成</b> 精密な鑄物を造るために、鑄型を850~900℃で7~8時間焼成する	 <b>12 注湯</b> まだ熱い鑄型に、溶かした銅合金を溝口から注ぎ込む
 <b>13 型ばらし</b> すっかり冷えた後、鑄型を割って製品を取り出す	 <b>14 仕上げ</b> 鑄や鉄で鑄物を削り、原型と同じ表情をつける	 <b>15 着色(煮色)</b> 硫酸銅、緑青の伝統的な藍色液に浸し、煮込む	 <b>16 「聖観音像」完成</b> 完成品

## 焼型鑄造法工程

(高岡市教育委員会 ものづくり・デザイン科学習資料「鑄造法と製作工程」を一部加工)

今日、鑄物の生産は、大量生産に併せて郊外の大規模工場で一括して行われることが多くなったが、戦後しばらくは問屋が個々の職人に注文して商品を製造させる問屋制手工業体制が採られていた。この流れを受け、現在でも金屋町では、昔ながらの職人が民家裏の作業場などで鑄造や着色などの作業を行っている。

町のメインストリートにあたる石畳通りの裏手の小路沿いにある鋳物工房利三郎は、現在も伝統的な技法で鋳物づくりを行っている店である。作業場では、型づくりや鋳造、仕上げなどの工程が行われており、作業場の煙突からは煙があがり、あたりには独特の匂いがする。また、金属の溶解の様子や鋳型に金属を流し込む作業などを実際に見て、高岡鋳物の歴史に触れることができる。



鋳物工房利三郎

金屋町と内免のちょうど境界に位置する内免の立川家は、古くから着色を営んできた家である。同家の主屋は、金屋町も含めて周囲で唯一の石置き屋根を残す町家で、間取りや内部の意匠から、明治初期には建てられたとされる。敷地裏手の小路を挟んだ向かい側には作業場があり、現当主が日々着色の作業を行っている。



立川家

金屋町では、さまのこの町家以外にも鋳物生産の近代化の過程で残されたキューポラや工場など、鋳物の歴史を感じることでできる建造物が残されている。金屋町北端の内免にほど近い場所には、かつて南部鋳造所で使用されていたレンガ積みのキューポラや煙突がある。また、鋳物生産の拡大に併せて敷地が拡大されていった千保川沿いの後背地には、現在は使用されなくなった鋳物工場跡地などがあり、かつての町の繁栄を感じさせる。さらに、金屋町には道路脇や各家の蔵前などに数多くの祠がある。道路脇のものは、早くに亡くなった子どもなど家族の供養をするためのもので、蔵の前などに置かれたものは、鋳物作業で火を扱うことから、火除けの意味で置かれたものである。



旧南部鋳造所キューポラ・煙突



祠

また、金屋町では、利長の命日にあたる6月20日に毎年御印祭が行われている。御印祭は、利長に対する報恩感謝の念を表して催されるもので、利長没後まもなく始められた。「高岡鑄物史話」には、嘉永7年(1854)に鑄物師伝来の“御印”類を高岡町奉行の検分に供した際の目録の覚えが採録されている。伝来では、当初は利長の親書、絵像を礼拝していたともいうが、現在は有儀正八幡宮から金屋町公民館内に設けられた祭壇に祭神を招き、式典が執行されている。



御印祭

祭礼前日には、まず前夜祭として有儀正八幡宮からご神体が金屋町公民館に移される。祭礼当日は、千保川沿いに立つ高岡銅器発祥の地の碑の前に集合した後、行列がスタートし町中を練り歩く。この練り歩きの際に歌われるのが弥栄節である。弥栄節は、鉄を溶かすために溶解炉へたたら板を踏んで風を送る作業が重労働であったことから、気を紛らわせるために歌われ始めたと言われる作業歌である。弥栄節は明治末期になりたたらが使われなくなると一時歌われなくなったが、大正末期から昭和初期にかけて民謡として復興した。また、戦時中にも一端途切れたことがあったが、昭和25年(1950)に高岡弥栄節普及会が組織され復興された。その後、昭和32年(1957)には民謡の研究者らにより音節を整え新しく振り付けが行われ現在の弥栄節が誕生した。その一句には次のようにある。

エンヤシャ ヤッシャイ	河内丹南 鑄物の起こり ヤガエフ
今じゃ高岡 金屋町 エー	ヤガエフ エンヤシャ ヤッシャイ
今じゃ高岡金屋町 エー	エンヤシャ ヤッシャイ

たたらを踏む際の掛け声が韻よく刻まれる中に、金屋町の鑄物の起源や、重労働の中でも自分たちの行う作業に誇りを持つ心が感じられる。

なお、御印祭で弥栄節が踊られるようになったのは、昭和27年(1952)の同祭からで、地元の青年らが弥栄節を歌いながら踊ったのが始まりである。以来地元では、これを後世へ継承すべく、昭和50年(1975)には高岡やがえふ保存会が結成され、伝承のための様々な取組みがなされている。

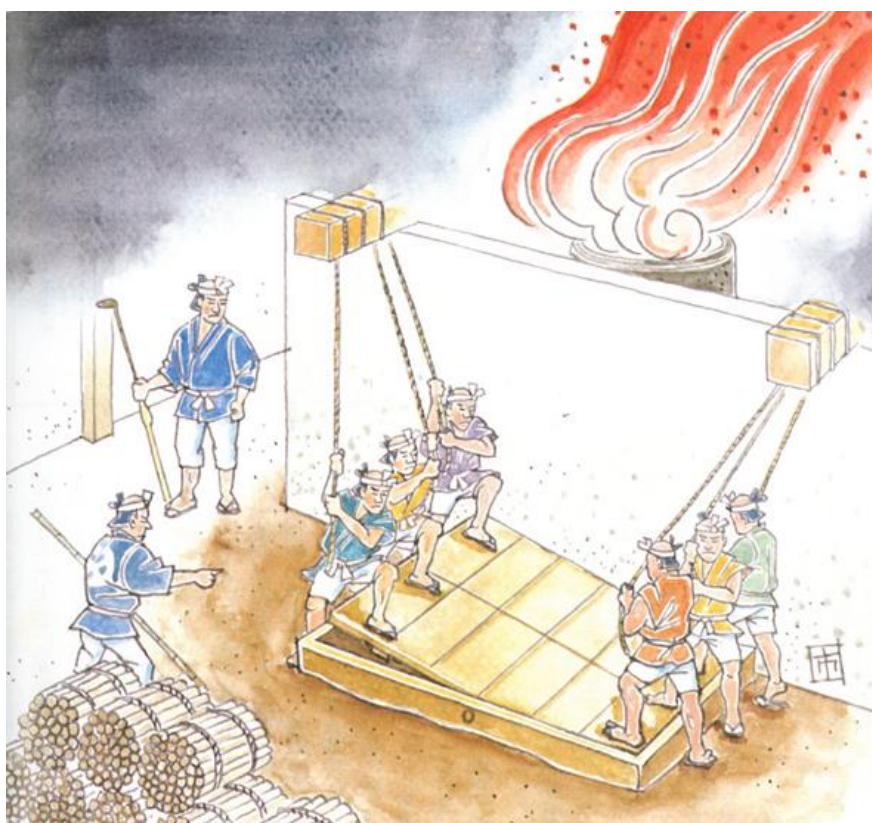
金屋町では、鋳物作業や御印祭などを通して、風景や音、匂いなど五感全てで鋳物のまちの風情が感じられる。昭和8年（1933）には与謝野寛と晶子が金屋を訪れているが、その際に次のような歌を詠んでいる。彼らもまた鋳物のまちの生み出す独特の風情に大きく心を揺り動かされたのだろう。

高岡の町の金工たのしめり 詩の如くにも鑿の音をたつ（寛）

鋳物師よ楽しかるべきみずからを 釜一つにも試きんとする（寛）

われ入りて鍋作りする炉にあるを 夕日と思う広き金屋に（晶子）

工匠が黒部の川を思わせて 銀の筋置くかねの鉢かな（晶子）



たたら吹作業の図（たかおか一歴史との出会いーより転載）



図：鋳物のまち金屋に見る歴史的風致

## (4) 北の玄関口伏木・吉久と祭礼行事に見る歴史的風致

## ①みなと町伏木と祭礼行事



藩政期の伏木浦（高岡市立伏木小学校蔵）

伏木は、古代には越中の国府が置かれるなど、古くから越中の政治・経済の中心として栄えた地であり、当時国守として赴任した万葉集の代表的歌人・大伴家持が、その風光明媚な自然に感動し多くの秀歌を残した景勝地でもある。

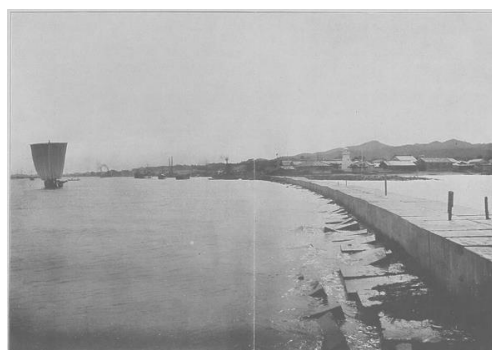
長きにわたって、政治・経済の拠点として栄えた伏木であるが、その経済基盤は舟運によるところが大きい。北は日本海に面し、小矢部川や庄川といった大河川の河口に位置しており、この恵まれた立地を活かして、早くから日本海側でも有数の港として発展してきた。

近世には、加賀藩から渡航の許可や税の徴収といった公的な役割を認められ、大坂から瀬戸内海をとおり、下関を廻って日本海に入り、北は北海道まで、各港で買積した物資を売りさばく北前船（バイ船）で栄えた。特に、港に程近い旧伏木村（現在の本町、中央町、湊町、錦町のあたり）には、北前船で財を成した多くの廻船問屋が現れた。

明治期に入り、大型船舶の入港など、伏木港も徐々に近代化を迫られたが、この際に大きな活躍を見せたのも廻船問屋達であった。特に、能登屋の藤井能三は、強く開港を訴え、私財を投げ打って伏木燈明台や伏木測候所（現 高岡市伏木気象資料館）を建設するなど伏木港の近代化に大きな役割を果たしている。こうした廻船問屋の活躍もあり、その後も伏木は港町として大きく発展した。



伏木開港場（明治32年（1899））



伏木港 『富山県写真帖』富山県編（明治42年（1909））より



帆船と蒸気船（大正13年（1924））

港町として発展した伏木では、文化流入や火災の影響などによって多様な建造物が連坦している。本町通りは、最も早くから町並みが形成された場所で、かつては廻船問屋の邸宅が多くあったところでもある。現在、廻船問屋の遺構は残念ながら残されていないが、明治期から大正期に建てられたとされる、切妻造り・平入・2階建・登梁形式の真壁造りの町家を見ることができる。

一方で、中道通りや湊町本通りは、明治以降の港の近代化と発展の中で、町が拡大していったと考えられる地区で、国外などからの文化流入の結果生み出されたと思われるハイカラな洋風建築や和洋折衷建築、この道が耐火路線に指定されたことに起因する土蔵造家屋など多様な建造物を見ることができる。中でも、高岡商工会議所伏木支所は、明治43年(1910)に伏木銀行として建てられた建物で、土蔵造・2階建・寄棟・瓦葺で、スクラッチタイルの外壁がお洒落なものである。カラフルな花笠や、前人形のかわいらしい踊りに彩られた山車が、この建物をはじめとするハイカラな建物の前を巡行する様は、歴史的だが、どことなくお洒落さを感じさせるものである。

この町並みを舞台に、伏木ではかつてと変わらない港町の生活が繰り広げられる。伏木の代表的な廻船問屋である藤井家の残した「藤井家文書」のなかに「嘉永三年伏木村草高数免等高持百姓中留帳」なるものがあり、その中に当時の住民の屋号をみることができるが、これによれば、網屋や鍛冶屋、浜屋、魚屋、茶屋、油屋、酒屋など様々な職業を類推させる屋号がある。現在では、港の近代化に伴って人々の職業形態もかなり変容を見せているが、今でも魚屋やお茶屋、酒屋、石油卸商などかつてと変わらない仕事を営む店舗が数多くあり、輸出入した商品などを取り扱う商社が数多くみられる。なお、伏木港は現在、国際拠点港湾伏木富山港として環日本海交易の拠点となっている。



谷村家住宅主屋



高岡商工会議所伏木支所



銅板建築の店舗

このように早くから舟運を生業とした伏木の人々にとって、何よりも大切なことは航海の安全と無事であった。そのため、伏木ではこれを象徴したいくつかの祭礼行事が見られる。

最も有名なものは、市指定無形民俗文化財に指定されている伏木神社春季例大祭の祭礼行事である。伏木神社は、伊勢神宮から布師浦の蔵ヶ浜に勧請され、海岸鎮護・住民の守護神として創祀されたと伝えられ、文化10年（1813）に波の浸食を受けたことから現在地に遷座した由緒ある神社である。境内には歴史を感じる大木や鎌倉時代に創作されたと伝わる狛犬があり、悠久の歴史が感じられる。



伏木神社

この伏木神社の春季祭礼として行われる同祭は、神輿渡御と勇み山車行事（伏木曳山祭）からなっている。その歴史は古く、行事に用いられる山車の箱書きには、文政3年（1820）や天保2年（1831）といった記録が見え、少なくとも200年間は続けられていると考えられる。

祭は、5月14日と15日に行われるが、祭に用いられる山車は、早いところでは一週間も前から山蔵より蔵出しされる。これは、人集めや曳き方の練習、山車に不具合がないかを確認するためと言われているが、山車が順次曳き出されるうちに町全体に祭の気分が色濃く流れ始める様子からは、祭を待ちきれない人々の気持ちを更に高めるための演出なのではないかとすら感じられる。

祭前日には宵祭が催される。宵祭では、山車の飾り付けとともに、山宿にご神体が飾られ、御膳やお酒が並べられ披露される。山宿は、その年に出産や結婚などおめでたいことがあった家が選ばれるが、この地域の人々にとっては、至極光栄なこととなっている。



曳山祭山宿

人々の気持ちも最高潮の中、いよいよ祭当日を迎える。当日は、まずは朝6時頃から各山車の代表者が伏木神社へ集まり、その日の祭の無事を祈ってお祓いを受けるところから始まる。その後、同神社の拝殿で例大祭と神輿渡御祭が厳かに挙行される。境内での神事後、御神輿の巡行が開始される。神輿渡御は、母衣武者行列と花笠がともに巡行する古い形式をよく残すもので、午後3時30分頃に伏木神社へ還御されるまで、氏子町内を順次巡行される。

祭のメインである伏木曳山祭も同時に始まっている。まずは、朝早くから山

の飾り付けが行われ、美しい花笠山車が作られる。その後、山宿にご神体に移され、お神楽の奏上が行われた後、本囃子も勇ましく町内曳きが行われる。11時頃からは、6基の山車が順に伏木神社へ参拝し、御祓いを受け安全を祈願する。

午後1時、いよいよ花笠山車が、囃子の音色と曳き子達の「イヤサー、イヤサー」の掛け声に併せて曳かれ始める。山車はみなと町のハイカラな町並みを舞台に曳き回され、一層その華やかさが際立つ。また、街路網は碁盤目状に敷かれているうえに、その路は細く、直角の曲がり角が多く、曳き子たちは町角での山車の方向転換に苦心を強いられる。しかし、実はそこにも祭の見所がある。曳き子達が曳き子頭の合図のもと、テコの原理で長手をうまく利用し、チームワークよく曲がる光景は見事で、観客は拍手を送って喜ぶ。



花笠山車

花笠山車の奉曳が午後5時まで続けられた後、一旦山宿へ移し解体され、今度は提灯山車へ組み替えられる。提灯山車は飾り付けられた山車同士が激しくぶつかる(通称「かっちゃ」と言われる。)もので、日中の花笠山車とは趣が全く異なり、はじめて見るものならば、必ず「おおー」と歓声をあげるほど非常に勇ましいものである。

提灯山車の曳き出しは夜の7時30分頃から始まるが、この時刻になると、かっちゃが行われる場所には、大勢の人々が押し寄せる。この時ばかりは、家々の窓は全て開けられ、家族や親族などが身を乗り出して観戦する。観客の見守る中、双方の山車の総代の合図により拍子木が打たれると、いよいよ開始である。



伏木曳山祭(けんか山)のかっちゃ

山鹿流出陣太鼓のお囃子と曳き子衆の勇ましい掛け声とともに、今にも壊れそうな勢いで山車が「ずしーん」とぶつけられる。山車に飾り付けられた提灯は激しく揺れ落ちるものもある。間髪容れずに拍子木が打ち鳴らされると2台の山車は再び激しくぶつけられる。観客は大きな歓声をあげ、カメラのフラッシュが無数にたかれ、会場は興奮の坩堝と化す。こうして人々が待ちに待った祭は熱狂のうちに終わっていく。

このかっちは、かつては町内間の対抗意識が非常に強かったようである。現在では対抗意識そのものは薄れてきているが、祭が人々の大きな誇りとなっていることは疑いがない。都会へ就職している者は、祭の日が平日であっても必ず帰ってくる。この日ばかりは子どもの夜更かしも許される。伏木曳山祭は、港町特有の荒っぽい気質と、郷土意識を再確認する場なのである。

このほかの舟運にまつわる祭礼行事に伏木帆柱起し祝唄がある。これは、毎年春先の出港準備の際に船主を中心とした地元の人達が浜へ集まり、航海の安全を祈り、鉦や太鼓を打ち鳴らし、「木遣り歌」を歌い踊りながら帆柱を立てたことに由来するもので、ソリャエーという力強い掛け声が印象的である。

ソリャエー帆柱起しで ヤーレン ソリャ ヤートコセーヨーイヤナー  
めでためでたの伏木の浜辺ヨーイトナー ソーラン アリャエーノ  
ヨーイトコ ヨーイトコナー

古老などにより長く歌い継がれてきた祝い唄だったが、昭和40年代には保存会が結成され、「手踊り」や「扇子踊り」、「櫓踊り」などの流し踊りが創作された。近年は船の出港に併せて行事を行うことはなくなってしまったが、地区の小学校の運動会や、年に一度開催される伏木港まつり、勝興寺でのイベントなどの大きな行事の際には、必ず決まって行事が催されている。

こうして祭を通して、船の航海の安全と無事が祈願され、民衆の結束がさらに強められ、町ではいつもと変わらぬ港町の日常が繰り広げられていく。



図：北の玄関口伏木・吉久と祭礼行事に見る歴史的風致（みなと町伏木と祭礼行事）

## ②吉久と獅子舞



石黒信由作図 吉久御蔵絵図（文化2年(1805)）高樹文庫蔵

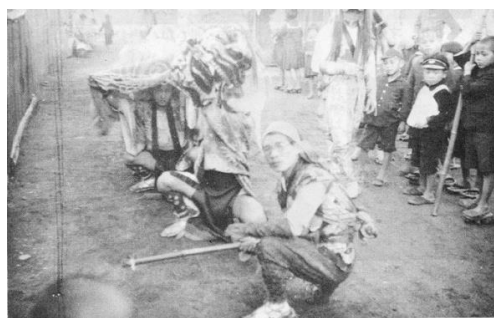
吉久の獅子舞は、吉久神明社の秋季例大祭で舞われるものである。吉久は、小矢部川を挟み伏木の対岸に位置する地区で、江戸時代に加賀藩直営の御蔵が置かれ、この御蔵を中心に発展してきた町である。江戸時代になり、各藩の領域経済が次第に全国市場の中に取り込まれ始めると、米価も大坂の米市場において設定された価格に左右されるようになった。また、年貢の取立てや支配等をめぐり農民とのトラブルが絶えることがなかった。加賀藩ではこうした動きへの対応として、御蔵の設置や十村制度の整備、灌漑用水の整備といった改作法を実施し、年貢の確実な徴収と百姓など民衆の生活の安定を図った。吉久の御蔵はこうした流れの中で作られたもので、その規模も間口30間、奥行き4間の大きな建物が6棟も配されたもので、礪波・射水両郡の蔵の中でも飛びぬけて大きかったようである。さらに吉久の御蔵は、単に年貢米を収納するだけでなく、礪波・射水両郡の御蔵の中で唯一、両郡の収納米の詰込所でもあり、小矢部川や庄川を下って運ばれてくる年貢米の集散地として、あるいは伏木港から廻米として積み出される玄関口という重要な役割を果たしたのである。明治の近代化の流れの中でもその機能は失われることはなく、かつての御蔵はそのまま米や魚肥の倉庫として使用されるなど、吉久は変わらず伏木港の最前線基地として発展した。

このように加賀藩最大の米の集散地として栄えた吉久には、江戸時代の末に

は曳山があったと伝えられるくらい経済力があり、古くから豊かさを背景とした獅子舞が行われてきたようである。

かつて吉久では、あんころの獅子とおもての獅子の二つの獅子舞があった。あんころとは、吉久の町の中心を通る旧街道から東側あたりに位置する地域を指す言葉で、吉久でも最も古くから、村が開かれたところでもある。あんころの獅子は通称あんころの宮といわれる日の出町神明宮の祭礼行事として舞われたもので、加賀獅子の流れを汲み、なぎなたや棒を激しく振り回す荒っぽいものであったようである。おもてとは、旧街道の西側、御蔵の置かれた方角で、町の発展と併せて拡大していった地域を指している。おもての獅子も、あんころの獅子と同じく、棒術やなぎなたの武術を中心としたもので、時に見物人が怪我をしたり、天狗の鼻が飛んだりするほど荒っぽいものだったようである。このあんころの獅子、おもての獅子は、ともに起源をはっきりと記すものはないが、口承では近世末から明治初期には既に始まっていたようであり、昭和戦前の写真には獅子舞の様子が収められている。

この両獅子舞とも若者の減少等により伝承の危機を迎えたが、昭和35年(1960)頃に青年団が中心となって両獅子の合併がなされ、現在の吉久の獅子舞が生み出された。従って、現在の吉久の獅子舞いは、両獅子の荒っぽい性格をよく受け継いでおり、天狗が棒や長刀、松明を縦横に振り回して獅子を打つという豪快な演目で構成されている。



よっさ獅子舞(昭和初期)

祭は6時頃から始まる。はじめに、天保4年(1833)に建てられたとされる入母屋造・棧瓦葺・正面屋根破風・一間の向拝を流した拝殿の通称大宮、吉久神明社で獅子の宮参りが行われる。神明社で獅子頭に御幣を付けてもらい二舞、三舞した後、日の出の宮、浅野の宮と獅子舞が奉納される。それから町内を回るが、近年では全町が公平になるよう回る順番を毎年変えている。



吉久の町並み(南西から)



吉久の町並み(北東から)

吉久の本通りは、かつて能登から富山市岩瀬へと至る浜往来から放生津で分かれ高岡へと向かう放生津街道が通っていた場所で、今も藩政期のままの湾曲した道路が残り、道路の両側には、幕末から昭和戦前に建てられた伝統的な町家が建ち並んでいる。これらの町家は、北陸に特徴的な雪を意識した軒の深い和風町家の外観を呈するが、他の地域と違う吉久独自の特徴として、裏手まで抜ける通り土間がないことなどが挙げられる。これは、吉久の町が米商と農家という二つの性格を兼ね備えていたことから生み出されたものと考えられる。



能松家住宅主屋  
(明治末～大正初期)



有藤家住宅主屋  
(大正5年(1916)～大正6年(1917))



丸谷家住宅(旧津野家住宅)主屋  
(明治中期)

町内を回る際は、目出度いことがあった家選ばれて獅子舞が舞われる。各家では花(祝儀)が打たれると、獅子取りと獅子はしゃがみこみ、その間に紋付袴の世話方が中腰になりショモウ(目録)をあげ威勢よく口上を述べる。

ショモウ ショモウ 目録一つ！ 御酒万樽 御肴沢山！  
金子有り有り右は人気栄富栄富！ 御贔負～  
とあって〇〇様より吉久獅子舞若連中に下さる～

口上が詠み終わられると、獅子が勢いよく目録をくわえ、玄関先まで入り込み、舞を見せる。吉久の獅子は、獅子の胴に何人もの男が入る百足獅子と呼ば

れるもので、獅子はバクバクと激しく口を開け閉めしながら大きな動きを見せる。これをあやす主役は青年の扮する天狗である。太鼓と笛の音が鳴り響く中、ずっかうそと呼ばれる被り物をし、袂の着物に野衿（たつつけ）をはき、小手をした天狗と、その出で立ちに天狗の面をかぶった大天狗が出て、六尺棒や刀、薙刀などをもち、勇ましい武術で獅子に立ち向かい、打つ。



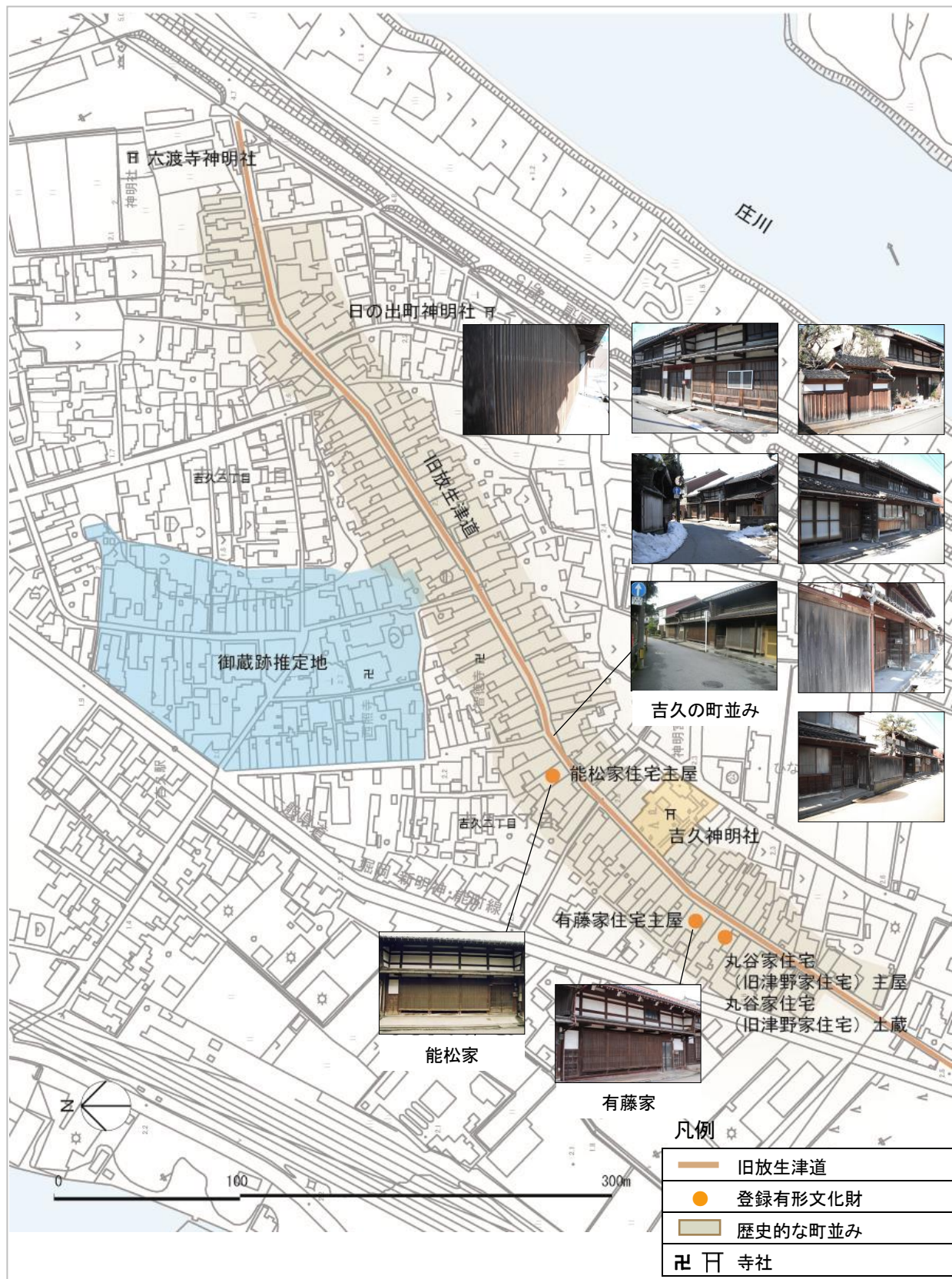
伝統的な町家とよっさ獅子舞

また、吉久の獅子舞の大きな見所の一つにハイッタ・ハイッタがある。ハイッタ・ハイッタは、家の座敷まで獅子が上がりがこみ、家の中で獅子が踊るもので、ハイッタ・ハイッタの会場と決まった家では、家の中を仕切る建具が全て外され舞の舞台が準備され、早くから家族や親族が集まって宴を催しながら、獅子が来るのを待つ。いよいよ獅子が来ると、全員一斉に立ち上がり、身を乗り出しながら口上を見つめる。口上が終わると獅子はものすごい勢いで座敷へと突入し、舞が行われる。獅子方も力が入るのか、外で見るよりも遥かに激しく見える。時にものを壊すこともあるが、そんなことは一切おかまいなしで、人々は熱狂し大きな歓声をあげる。外にも大勢の人が集まりその様子をじっとみつめている。実は、この瞬間が最も吉久の人々と、伝統的な家が輝く瞬間なのかもしれない。



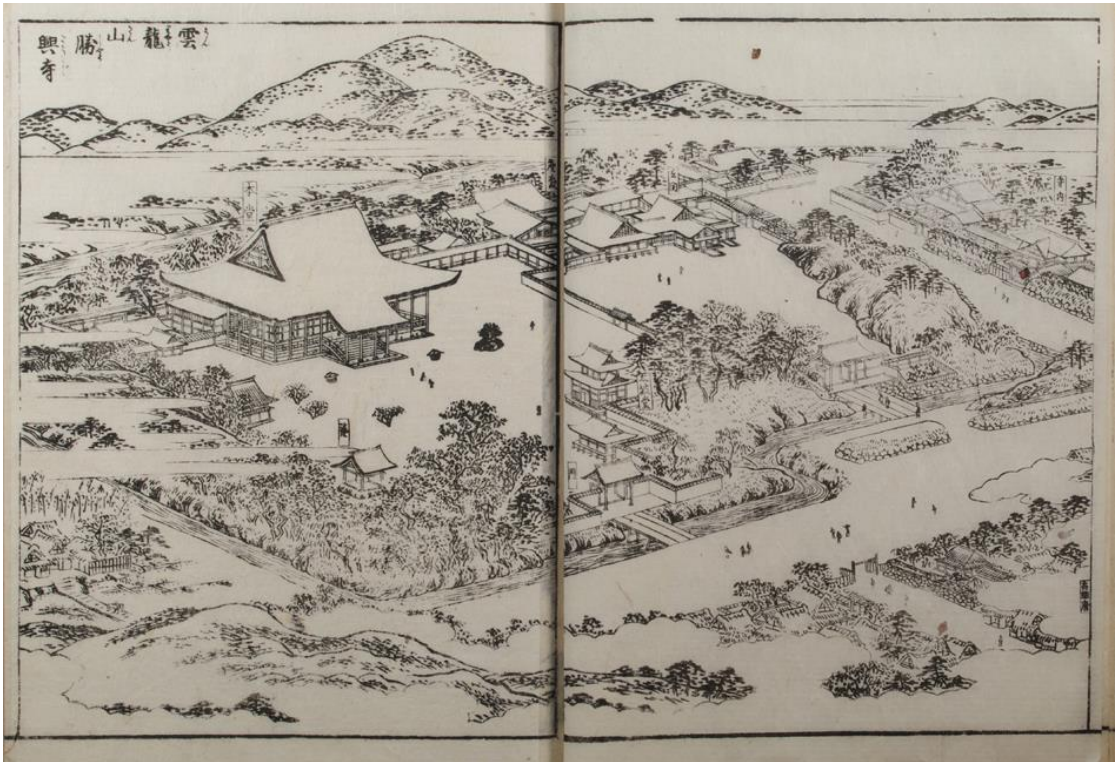
ハイッタ・ハイッタ

かつての吉久の隆盛を偲ばせる町家が建つ狭い道路で、荒々しく大きな動きの獅子が繰り広げられる様は、対照的なコントラストを描きつつも見事に一体化しており、良好な歴史的風致を形成している。



図：北の玄関口伏木・吉久と祭礼行事に見る歴史的風致（吉久と獅子舞）

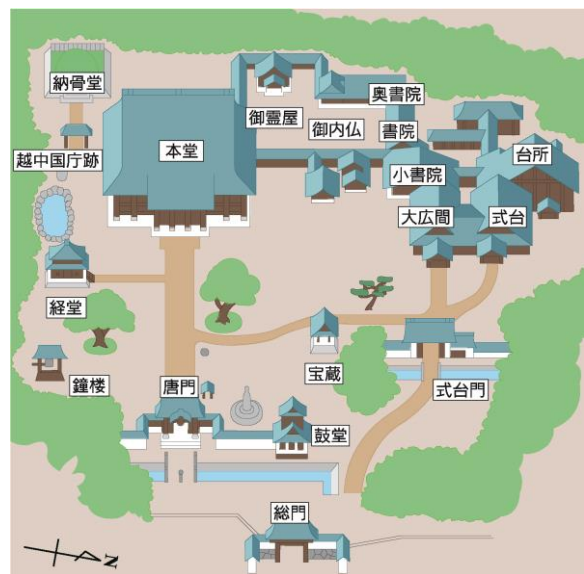
(5) 勝興寺と寺内町に見る歴史的風致



「雲龍山勝興寺」(享和3年(1803年)『二十四輩巡拝図会』巻之三) 高岡市立博物館蔵

伏木みなと町から伏木台地を登ると勝興寺と同寺を中心に形成された寺内町がある。勝興寺は、蓮如上人縁の越中国礪波郡蟹谷庄土山の「土山御坊」にはじまる浄土真宗本願寺派の古刹である。天正12年(1584)、当時の領主神保氏張から寄進を受けて現在の地へ移り、戦国期には越中における一向一揆の拠点寺として、江戸時代以降は越中の浄土真宗本願寺派の触頭であり、また前田家や公家等と強く結びつき寺勢を保持した。境内地は古代には越中の国庁があった地と推定され、中世には古国府城が置かれたところで、現在も境内の周囲には城郭らしい堀と土塁が遺存している。

この境内に本堂をはじめ大広間及び式台、御内仏、経堂、鼓堂、唐門や総門など12棟の建造物が配され、浄土真宗の典型的伽藍配置を示している。また、各建造物は全て近世に建てられたもので、規模・意匠など



勝興寺伽藍配置図

が優れており、全て重要文化財に指定されている。



勝興寺本堂



勝興寺唐門



勝興寺鼓堂



勝興寺本堂と越中国庁跡の石碑



勝興寺台所

寺内町は、伏木の地に勝興寺が寺地を構えた時以来、寺の境内地である古国府の中に生まれた町である。天正 16 年（1588）には、利長が勝興寺の勢力を抑えるために古国府から古府村を分立させており、寺内町は古国府のうち門前の 75 石のみを指すようになった。寺の総門前には、子寺や役寺が置かれ、門前から東へ走る道に沿って上町と中町が連続し、その東端で道は北と東の台地下への二本に分岐し、台地の東縁辺に沿って南北に浦町、台地の東麓に沿い北行しさらに東へ折れて下町が形成されている。



寺内町の町並み

門前の各寺院は全て歴史的なもので、それぞれの建物が伝統的な様式を有している。浄徳寺本堂は、江戸時代中期から後期に建てられた切妻造り・平入のお堂で、半分を本堂、もう半分を住坊とした特徴を持ち、木組みなどが時代を

よく表している。入報寺本堂は、小型であるにも関わらず矢来をもうけ、外陣の頭貫虹梁や出組斗栱等に特色を持っている。この他の寺院もそれぞれ意匠などに歴史的な特徴が表れている。

町家も伝統的なものが残されている。浦町の南端西側にある北村家は、明治8年（1875）に建てられた切妻造り・平入・登梁形式の町家で、格子の代わりにスムシコという割り竹をすだれ状に編んだものがはめ込まれた表構えに特徴がある。

また、勝興寺寺内町の大きな特徴の一つとして、住民の職業構成が挙げられる。寺内町には、勝興寺家中でも身分の低いものや、元々この地に住み続けていたもの、同寺周辺の村々から移住してきたもの、在所は別に持ち商売のための別家を構えるものなどが居住していたが、この地が伏木の港に程近く、古府村の分立前から古国府では舟運を営む人がいたこと、古国府近接地域からも多くの人々が移住してきたことなどから、舟運に従事する町民の割合が非常に高く、舟運による収益が同寺と寺内町の大きな経済的基盤となっていた。寺内町では、町人の中から町肝煎と町頭3人、舟肝煎1人が選ばれ、町自治の執行にあっていたが、勝興寺草創期から同寺の御用商人として活躍し代々町役人を勤めた塩屋のように、舟運などを通して得た財を活かし、同寺の運営に大きな功績を果たした町民の中から町役人が選ばれていたようである。



北村家住宅主屋

浦町から延長した通りの東側には旧秋元家住宅（高岡市伏木北前船資料館）がある。当家は、寺内町内ではないが寺内町域東端に隣接しており、廻船問屋並みの業をなした小宿の遺構である。明治20年代に建てられた主屋や、近世後期に建てられた米蔵、衣装蔵など一連の建物が残り、市指定文化財となっている。当家は、町家では珍しく妻入りのアズマダチ形式である。これは、妻入り建物を建てるだけの広い敷地



旧秋元家住宅

があったことももちろん大きな要因の一つであるが、この地で廻船問屋並みの業をなした小宿として大きな財を蓄えていたことも要因の一つにあると考えられる。また、当家には港を見晴らせる望楼や、荷物を大量に保管することのできる大蔵などもあり、市内でも数少ない廻船問屋並みの業をなした小宿の遺構として非常に価値の高いものである。

このように、宗教的な結びつきだけでなく、舟運による経済活動を通じて、勝興寺が一種領主的な存在を果たしていたこの地域では、今でも同寺と寺内町の町民の密接な関係を示す様々な行事が行われている。

勝興寺では、年間を通して様々な宗教行事が行われているが、代表的なものに毎年1月に行われる御満座法要が挙げ

られる。御満座法要は、開祖親鸞聖人の遺徳を偲ぶ法要で、1月14日から16日にかけて、本堂内に高さ1.8m・重さ約150キロもあるデカローソクを立て、住職や参拝者による読経などが行われる。この法要が行われる勝興寺の本堂は、加賀藩の支援を受けて寛政7年（1795）に西本願寺阿弥陀堂を模して建てられたもので、桁行・梁間ともに40m近く、地方の寺院建築としては破格の規模であり、近世浄土真宗本堂の典型的構成を示す平面配置、木鼻や墓股・欄間などの彫り物装飾、内陣などに施された華麗な彩色などが見事なものである。平成16年度には約7年間をかけた大修理事業が完了し、現在はかつての威容を取り戻している。法要の際は、この本堂内に溢れんばかりに人々が集まり、御示談を受け一斉に経を唱える。その様子は、明治期の写真に収められた様子と何ら変わるものでなく、民衆の熱狂的な信仰精神が受け継がれていることを感じられる。

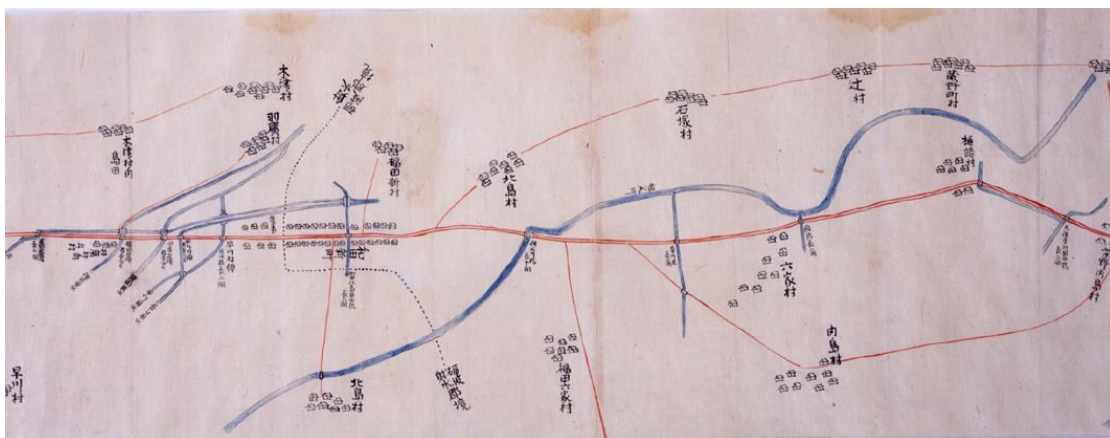


御満座法要

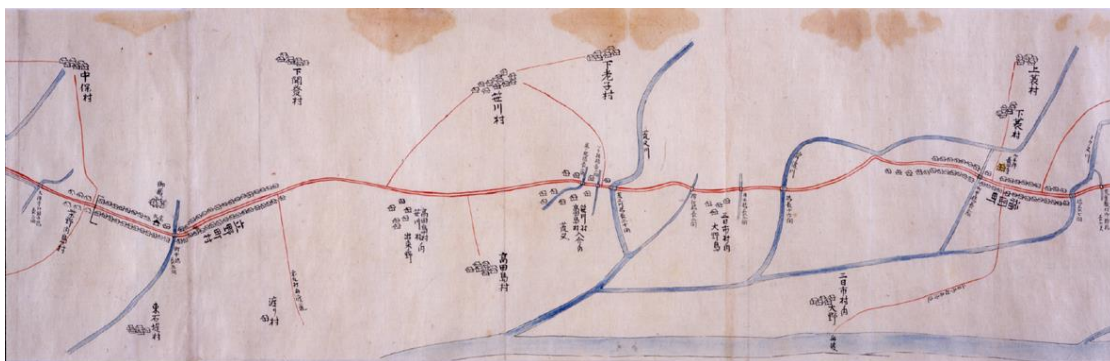


## (6) 旧北陸道と菅笠づくりに見る歴史的風致

### ①旧北陸道沿いの町々と祭礼行事



和田～立野 石黒信由作図 砺波郡・射水郡御鷹野道見取絵図(文政11年(1828))高樹文庫



立野～福岡町 石黒信由作図 砺波郡・射水郡御鷹野道見取絵図(文政11年(1828))高樹文庫

旧北陸道は、商都高岡の陸の主要な流通経路として利用された道である。山町筋を通過した北陸道は博労地区を通り、旧町城の西の玄関口にあたる横田町を抜け、和田、立野を経た後、福岡町、今石動、金沢へと通じていた。街道沿いの和田、立野、福岡といった町々は、人馬が往来する宿場町や在郷町などとして賑わいをみせた。現在、この道は国道8号の脇街道となっているが、歴史的な建造物や旧跡が数多く残されている。

山町筋を通り抜けた後、旧北陸道をしばらく進むと、水天宮祭の行われる中島町にたどり着く。中島町は、旧北陸道と千保川の交差点に当たる地で、かつては千保川の本流と、中島川と呼ばれる支流に挟まれた中州で、水陸交通の結節点として重要な役割を果たしていたが、立地上水害の多い地でもあった。こうしたことから、中島町では古くから水天宮を祀っており、これが現在の水天宮祭へ繋がったと考えられる。現在の形で祭礼が行われるようになったのは、大正3年のことである。(『中島町水天宮由緒』中島町自治会)

祭礼当日は、有磯正八幡宮からご神体の中島町の移住者宅等に招くことから始まる。有磯正八幡宮は中島町とはやや離れた横田町の外れにある宮であるが、これは、水害によりご神体が何度か場所を変えた結果、その無事を確実なものとするために有磯正八幡宮に置かれはじめたことによる。なお、この有磯正八幡宮は、拝殿・幣殿・釣殿・本殿からなる明治16年(1883)建造の建物で、拝殿・幣殿の八棟造りの屋根の形式や、本殿の入母屋造の屋根形式、組物の装飾などに特徴がみられ、平成18年(2006)に登録有形文化財となっている。祭神の移動後、祭典を行い、その後数多くの灯籠が千保川へ流される。漆黒の川面に灯籠の明かりがゆらめく幻想的な雰囲気醸し出している。



有磯正八幡宮

横田町を抜け、さらに旧北陸道を進むと立野がある。立野は、高岡町と福岡町のちょうど中間ほどに位置する集落で、慶長11年(1606)に利長から町立てを許され、高岡城築城後の慶長15年(1610)に北陸道の道筋変更に伴って宿場町となった。立野宿は高岡宿が忙しくなった時に加勢するという性格を持つ宿ではあったものの、寛文元年(1661)には米を収納する蔵が置かれるなど、街道沿いの重要な拠点として発展した。

この地を代表する旧家が日尾家である。日尾家は、この地区で代々蔵宿を務めた旧家で、明治28年(1895)に建てられた切妻造り・平入・平屋建で、前面を格子で覆い、玄関戸は大戸とし、小庇をつけず軒の深い大屋根をかけた古い形式の主屋を持ち、当家の繁栄と地区の歴史を感じさせる。



日尾家住宅

立野では、こうした豊かさを背景に福田神社の秋季祭礼に獅子舞が行われてきた。立野の獅子舞は、獅子舞の豊富な高岡でも特徴的なものである。立野の獅子は女獅子で、天狗と争うこともなければ、花をうつこともない。また、獅子の胴幕の長さがおよそ12メートルもあり、20人の人足が入ることになっている。祭礼時には、笛と太鼓の囃子が鳴る中、大獅子が各家を回り、玄関口で口をパクパクとさせて、家の邪気を追い払う。

このほかにも旧北陸道沿いでは、地域的特色の豊かな祭礼行事を見ることができる。佐助祭は、和田上町・和田中町で行われる祭礼行事である。和田は、慶安2年（1649）に礪波郡佐野村の佐助らの藩への嘆願によりようやく開かれた町である。しかし、町立て直後は年貢の負担等により町民の生活は非常に苦しいものであった。そこで、この状態を見かねた佐助が隠し田をつくり、町民らを困窮から救おうとしたが、藩の知るところとなり処刑されてしまったのである。佐助祭は、この佐助の恩に対し町民らが彼の遺徳を偲び行うもので、佐助の悲運な死後すぐに始められた。

祭は、まず和田神明宮の神事から始まる。その後、同神社の境内地にある佐助大明神を祀った小さな祠の前で祭文や玉串の奉納がなされる。なお、祭の際には、和田上町・和田中町の各家の軒先には佐助の像が描かれた行灯が掛けられることとなっており、山本家住宅をはじめとする伝統的な町家の軒先にも行灯がかけられ、町全体が佐助への感謝の念一色で染まる。



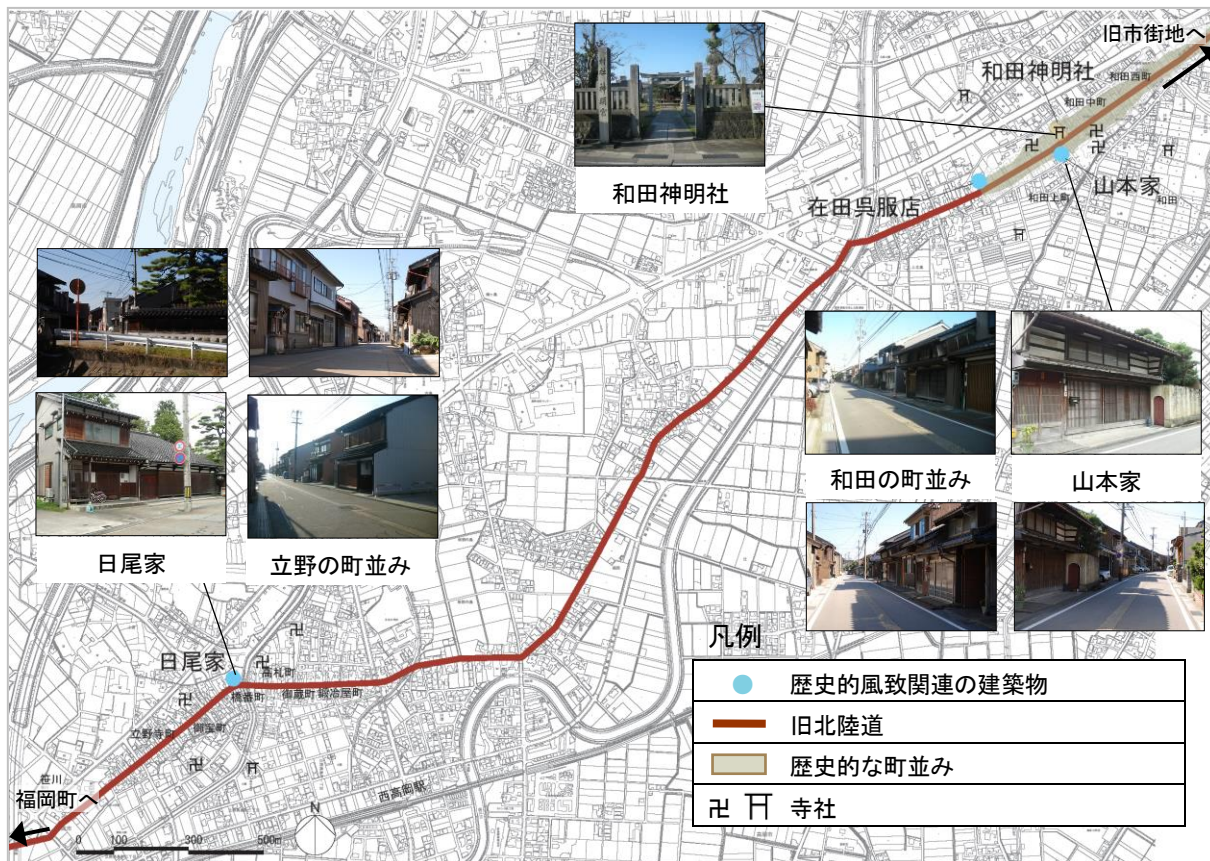
和田の町並み



行灯

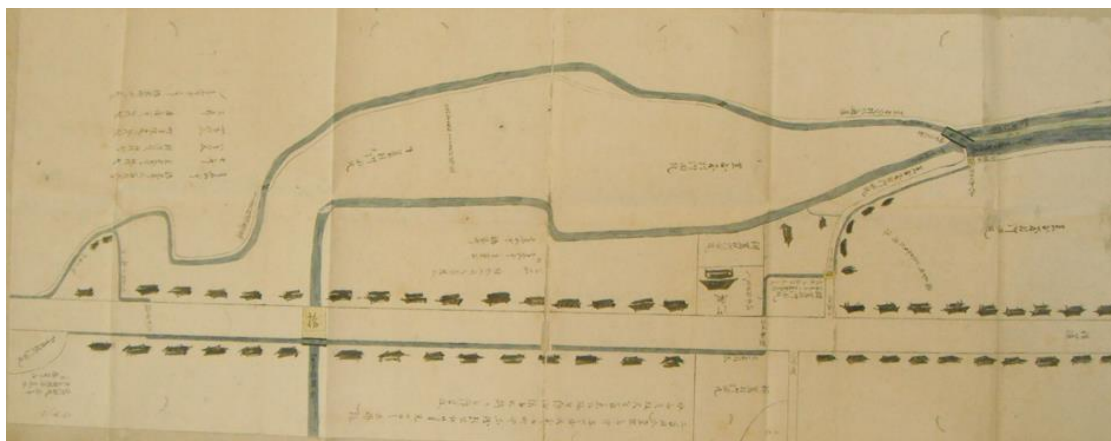


山本家住宅



図：旧北陸道と菅笠づくりに見る歴史的風致（立野及び和田）

## ②福岡町の菅笠づくり



福岡町火留用水絵図（18c 後半 杉野家文書）福岡歴史民俗資料館蔵

現在の高岡市域における西の玄関口が福岡町である。かつて福岡町は、周辺で作られる菅笠の集散地であり、菅笠が最大の特産品であった。この地域の菅笠づくりの起源は諸説あるが、古くは庄川や小矢部川の氾濫や、大地震等により発生した低湿地に自生した菅を利用して行った蓑作りから派生したものだとも伝えられている。以降、山間を中心に水稻の不適作地を利用して菅を育て、小矢部川の河原や中洲を利用して菅干しが行われてきた。江戸時代には、加賀藩の奨励も受け、現小矢部地域や福岡地域、立野や東五位など広い範囲で積極的に生産されるようになった。

17世紀の後半には、「加賀笠」の名で江戸や京都、大坂、西国筋、上州など全国各地へ出荷されていた加賀の菅笠だが、ここでも福岡町や小矢部を中心とした地域は大きな役割を果たした。全国へと販路を拡大するにつれ、菅笠の原料となる菅が不足したことから、19世紀以降、大量の菅を砺波郡から仕入れていたようである。また、金沢の堀川町で菅問屋街が形成されてくると、砺波郡で生産された菅笠の一部も堀川町の間屋へ出されるようになり、地元から直接出荷するものとの相乗効果でますます「加賀笠」の名が広まっていったようである。



菅笠



近代の菅笠づくりの様子

福岡町を除く地域では、現在菅笠の生産はほとんど行われていないが、福岡町では今でもかつてと変わらず手作業で菅笠が作られている。平成21年(2009)3月には、その技術や菅の生産から菅笠の製作、販売までの全工程をこの地域で行っていることが高く評価され、「越中福岡の菅笠製作技術」として重要無形民俗文化財の指定を受けた。また、平成29年(2017)には国の伝統的工芸品に指定された。

菅笠づくりは7月頃の育苗床づくりから始まる。刈り取りの終わった菅田を起耕し、水を入れ肥料を施す。その後、代かきを行い、田面を平らにして苗床がつくられる。9月下旬に夏芽が萌芽した菅のうちよいものを抜き取って苗とし、9月中旬から11月上旬にかけて植える。植えつけられた苗は12月頃に枯れ、新芽が出始めてから雪に覆われることになる。融雪後3月下旬から5月中旬にかけて不良芽が間引かれた後、7月中旬にようやく刈り取りの適期を迎えることとなる。

この頃には、山間などで青々と茂った菅田で、人々が手作業で刈り取りを行う風景をみることができる。刈り取られた菅は平場に集められ長菅と短菅に分けられた後、7月下旬の晴天の日に天日干しされる。かつては山間地の斜面や川原や中洲を利用していた干し作業は、現在は家の庭などで作業が行われているが、あたり一面に菅草が敷き詰められた光景は現在も季節の風物詩となっている。



菅干



近代の菅笠づくりの様子



菅田(西明寺地内)



菅草刈



菅干

菅笠の製作は、竹を割って笠骨をつくる仕事と、笠骨に菅を縫い付ける仕事に分けられる。昔から笠骨づくりは男の仕事、笠縫は女の仕事とさ



菅笠づくり



笠骨づくり

れてきた。笠縫の作業は、福岡全域で行われているが、特に西山丘陵の山麓に位置する西五位地区に従事者が多い。この地域には、砺波平野ではアズマダチがよく見られる。アズマダチは束や貫、梁の格子組をみせ、その間を白壁で塗った妻意匠、家を取り囲む屋敷林が特徴的なものである。笠縫作業もこのアズマダチ民家の広い座敷などを利用して行われている。(宮崎家：上向田など)



旧北陸道の町並み



旧北陸道の町並み（昭和10年代）

滝写真館提供

つくられた菅笠は福岡町の旧北陸道沿いの問屋街で保管され、全国の笠販売所へ卸ろされていた。今も街道沿いには、明治期から昭和初期に建てられた町家としては比較的規模の大きい旧菅笠問屋の民家が数多く残されている。これらの民家は、菅笠問屋の遺構らしく、オイの間の上に菅笠を保管する場所として中二階をもうける例が多い。町の南西端には、現在も現役で菅笠問屋を営む岸野有三家がある。当家



旧菅笠問屋

は、昭和2年（1927）建築の比較的新しいものだが、切妻造り・平入・2階建・登り梁という古い形式を残すもので、町でつくられた菅笠を仕入れ、必要な場所へと卸している。また、街道沿いには問屋以外にも、加賀藩歴代藩主が参勤交代に際して休憩所とした長安寺などの歴史的建造物や、藩主の喉を潤すのに供された殿様清水などの旧跡が残されており、菅笠に関わる人々の営みと歴史的遺産が一体となって良好な歴史的風致を形成している。



図：旧北陸道と菅笠づくりに見る歴史的風致（福岡）

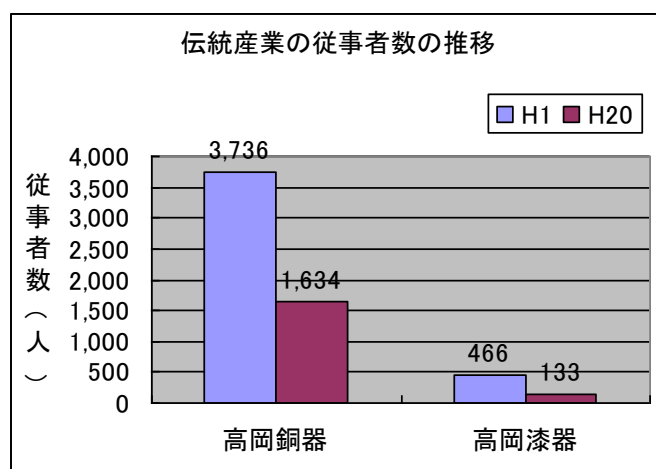
## 2 高岡の歴史的風致の維持及び向上に関する課題

### ①歴史と伝統を反映した工芸技術及び地域固有の祭礼・年中行事の継承と育成に関する課題

400年の歴史に培われた高岡の工芸・民俗技術や、地域の人々によって大切に守り伝えられてきた祭礼・年中行事は、歴史的建造物や歴史的な町並みといった有形の歴史文化資産とともに、高岡の歴史的風致に奥行きと層の厚さを感じさせる重要な要素である。

高岡には、昭和50年（1975）に国の伝統的工芸品の産地指定を受けている「高岡銅器」、「高岡漆器」のほか、「越中福岡の菅笠製作技術」として重要無形民俗文化財に指定された「菅笠」などがある。「高岡銅器」や「菅笠」は全国シェアの90%以上を占める一大産地であるが、雇用環境や生活様式の変化、また人々の生活用品に対する意識の変化等の要因により、従事者数の減少が著しく担い手不足が慢性化している。

また、高岡を象徴する大規模な祭礼行事の他にも、地域の人々の拠り所となっている数々の祭礼・年中行事が現存しているが、少子高齢化やコミュニティ意識の希薄化などにより失われつつある。



表：伝統産業の従事者数の推移

高岡市産業企画課「高岡特産産業のうごき」より

### ②歴史的建造物の保存と活用に関する課題

高岡には、歴史的風致の核となる歴史的建造物が数多く現存しており、うち国、県、市の指定文化財は適正に保護されているものの、登録有形文化財については、保存や修理に関する取り組みが十分とは言えない。したがって、適切な維持管理が行なわれないまま老朽化が進んでいる。

また、その他、高岡の町家や旧商家、旧問屋等の歴史的建造物は、伝統的建造物群の調査を除き悉皆調査や発掘調査等の基礎調査が不十分であり、その歴史的価値の認識不足や維持管理費の負担増、所有者の高齢化・後継者不足等の要因により、老朽化や消失が急速に進んでいる状況にある。

### ③歴史的な町並みの保全と周辺環境の調和に関する課題

旧高岡町の区域や伏木、吉久には、明治期以降の町家が集積しており、高岡の歴史的風致を形成する歴史的な町並みが良好に残されている。しかしながら、そうした町家の多くについては、老朽化が進む中で耐震性が確保されておらず、また間口が狭く奥行きが長いという形状から、機能性の向上や駐車場の確保など現代の生活様式にあった増改築がしにくいという問題がある。こうした中、伝統的な建築様式をもつ町家が取り壊され、空き地や駐車場等になっているところが徐々に増えており、良好な歴史的な町並みの破壊が危惧される。

また、町並み景観の阻害要因として、電線類やけばけばしい色彩の広告物が挙げられるほか、街道や小路などに過度に流入する自動車などによって、安心して散策できる快適な歩行空間が確保されていないという課題も挙げることができる。

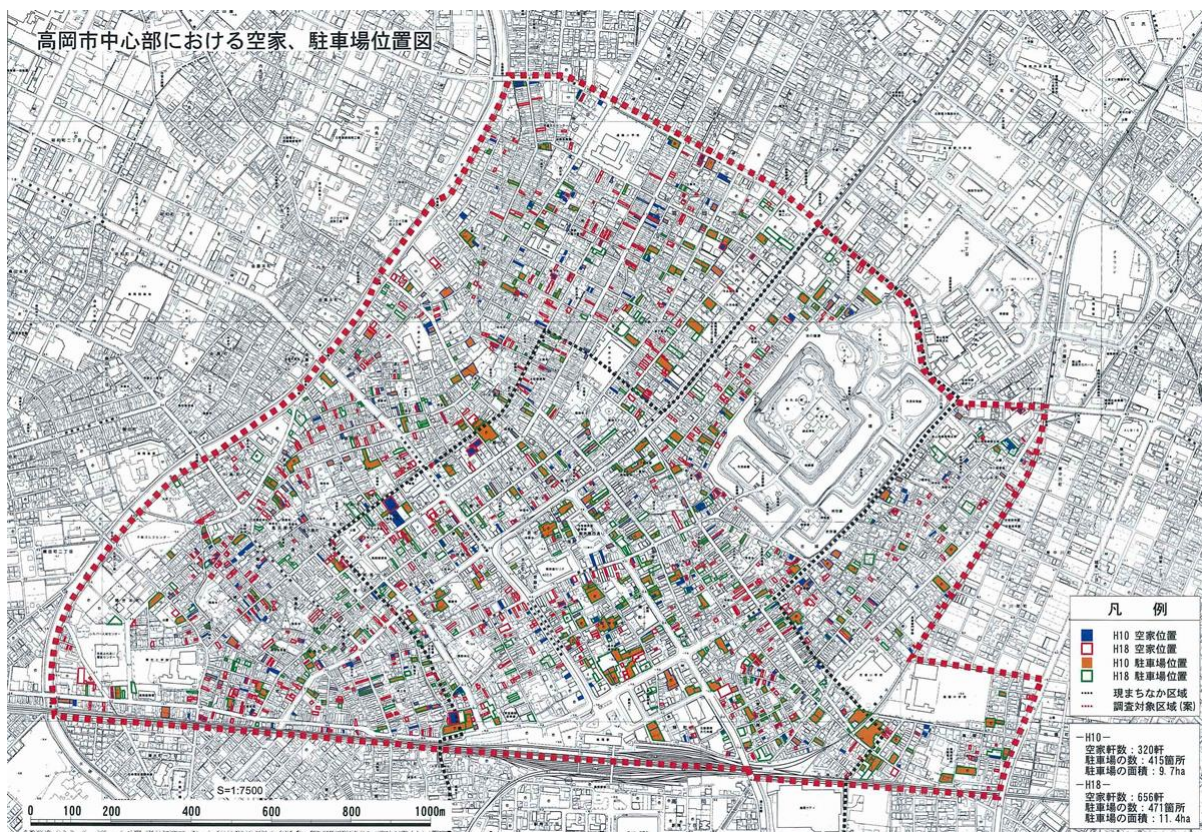
さらには、平成27年3月に長野—金沢間で北陸新幹線が開業し、新たな高岡の玄関口となる新高岡駅は、瑞龍寺や前田利長墓所が位置する現在の高岡駅の南側に整備されたことから、マンションや商業施設などの開発による眺望景観の阻害が危惧される。



町家に挟まれた空き地



町並み景観を阻害する電線類



図：空き家・駐車場の分布状況と推移 「高岡市まちなか居住推進調査」(平成18年(2006))より転載

#### ④資料の収集・保存及び調査・研究に関する課題

高岡は幸いにも戦災に遭わず、近世以降の歴史、民俗、産業などの貴重な資料が数多く現存しているが、拠点施設である博物館等が老朽化や長年の人員不足などの理由から十分に機能していない。したがって、これら資料の収集・保存や調査・研究の停滞が懸念されるとともに、体系的な情報の蓄積や発信が困難な状況にあり、貴重な資料が散逸する恐れもある。

### 3 総合計画や都市計画マスタープラン、景観計画等の状況及びそれらの計画との関連性

#### (1) 高岡市総合計画

基本構想：平成 29 年度～平成 38 年度

基本計画：平成 19 年度～平成 23 年度（第 1 次）

平成 24 年度～平成 28 年度（第 2 次）

平成 29 年度～平成 33 年度（第 3 次）

本計画では、『豊かな自然と歴史・文化につつまれ 人と人がつながる 市民創造都市 高岡』をまちの将来像として掲げており、「ものづくりの技と心」を礎とし、その英知とたゆまぬ努力によって町民文化の花を咲かせ、挑戦と創造を積み重ねてきた先人の志を受け継ぎ、すべての人がそれぞれの能力を生かして自立し、次代を担う創造性豊かな市民が育つ「市民創造都市」に挑戦していくこととしている。

また、この将来像を実現するために設定している5つの分野と17のめざすまちの姿のうち、〈地域産業〉「1 ものづくり産業が時代の流れに対応し、活性化している」において、②地域産業の競争力強化、④中小・小規模企業の経営基盤強化を、〈歴史文化〉「3 世代を超えて受け継がれてきた歴史資産が大切に継承され、輝いている」においては、①文化財の保存・活用、②歴史的風致の保全・活用を、「4 暮らしの中に万葉と前田家ゆかりの文化が息づいている」においては、①地域に根差した創造的な芸術・文化活動の育成をそれぞれ推進することとしている。

#### 第6章 施策の大綱

〈まちの将来像〉 豊かな自然と歴史・文化につつまれ 人と人がつながる 市民創造都市 高岡		子育て・教育	安全・安心
地域産業	1 ものづくり産業が時代の流れに対応し、活性化している	①新たな事業活動の創出 ②地域産業の競争力強化 ③産業基盤の整備・企業立地の推進 ④中小・小規模企業の経営基盤強化 ⑤雇用・勤労者福祉の充実	9 教育を通じて個性を伸ばし、生きる力を高め合っている 10 いくつになっても興味のあることを気軽に学んでいる 11 いつでも気軽にスポーツを楽しんでいる
	2 水・緑・食が豊かで暮らしにうおいがある	①農業の持続的発展 ②農山村の振興 ③林業の振興 ④水産業の振興	12 誰もが生き生きと自立して暮らしている 13 健康的な生活を送り、必要な時に適切な医療を受けられる 14 地域の人々の手で環境が守られている
歴史・文化	3 世代を超えて受け継がれてきた歴史資産が大切に継承され、輝いている	①文化財の保存・活用 ②歴史的風致の保全・活用	15 安全で快適な生活を送っている
	4 暮らしの中に万葉と前田家ゆかりの文化が息づいている	①地域に根差した創造的な芸術・文化活動の育成	16 その人らしさが尊重され、お互いに助け合いながら幸せに暮らしている
交流・観光	5 高岡の魅力を積極的に発信し、たくさんの人が訪れるようになっている	①観光資源の発掘と保存・活用 ②広域観光の推進 ③イメージアップ・誘致活動の強化 ④国内・国外交流の推進 ⑤インバウンドの推進	17 市民が主役の地域づくりへの支援 お互いに助け合いながら幸せに暮らしている
	6 生活の利便性が向上し、市街地に人が行き交いにぎわっている	①商業・サービス業の振興 ②中心市街地活性化の推進 ③市街地の整備 ④住宅・宅地の整備 ⑤良好な都市景観の創出	①市民が主役の地域づくりへの支援 ②多文化共生社会の推進 ③男女平等・共同参画社会の実現 ④平和な地域社会の形成
子育て・教育	7 交通ネットワークを活かし、県西部の中核的役割を果たしている	①高岡駅・新高岡駅の周辺整備 ②高道路路網・幹線道路網・地域公共交通体系の整備 ③港湾の整備・活用 ④広域連携の推進	①市民に開かれた市政の推進 ②高度情報化の推進 ③職業で効率的な行政の推進
	8 安心と希望、ゆとりを持って子育てを楽しんでいる	①教育・保育の一体的提供の推進とサービスの充実 ②新たな子育て情報提供システムの構築 ③安心して妊娠・出産・子育てができる体制の充実 ④地域の子育て力の応援	

図：高岡市総合計画の大綱

## (2) 高岡市都市計画マスタープラン

策定：平成30年（2018）12月

本プランでは、「市民創造都市 高岡」を将来都市像に定め、都市づくりの基本方針として《歴史・文化と自然を活かした都市づくり》、《安全・安心で快適に暮らせる都市づくり》を掲げている。

《歴史・文化と自然を活かした都市づくり》では、歴史まちづくりや文化創造都市の取組を推進するため、市内各地に分布する歴史・文化資産の保存・活用、歴史的な町並みの誘導や、歴史的風致が残る地域などにおける新たな創造の場の創出等を掲げている。

《安全・安心で快適に暮らせる都市づくり》では、本市の強みである自然的・歴史的な景観まちづくりの推進のため、恵まれた自然景観の保全や魅力的な都市空間の誘導を掲げている。

## (3) 高岡市景観計画

策定：平成21年（2009）3月（同年11月、平成29年2月変更）

本計画では、景観づくりの基本方針を〈1 高岡市固有の美しい景観資源を後世に保全・継承していきます。〉、〈2 県西部の中核都市として、魅力ある景観を創り出していきます。〉、〈3 美しい景観によって、市民の誇りと愛着を育みます。〉、〈4 魅力ある景観づくりをとおして、まちを活性化します。〉としており、市全域（景観計画区域）において大規模な建築行為等の形態意匠などを規制誘導すると同時に、高岡市中心部や伏木地区、福岡地区など歴史的町並み保全を進めていく地域を景観形成重点地区として指定し、建築物等の位置や高さ、色彩の基準を設けるなどして、周辺の町並み景観と調和した建築行為等が行われるよう規制誘導している。

### ◆ 景観づくりの基本方針 ◆

高岡市の良好な景観づくりに向けた基本方針を以下のとおりとします。

#### 1. 高岡市固有の美しい景観資源を後世に保全・継承していきます。

・高岡市固有の歴史・伝統・文化・風土が織り成す景観は、市民共有の貴重な資産であり、これを保全し、後世に継承していきます。

#### 2. 県西部の中核都市として、魅力ある景観を創り出していきます。

・高速交通網の整備などに伴い、県西部の中核都市としての魅力向上と、これに伴う都市の活性化へと導くため、魅力ある景観を創り出していきます。

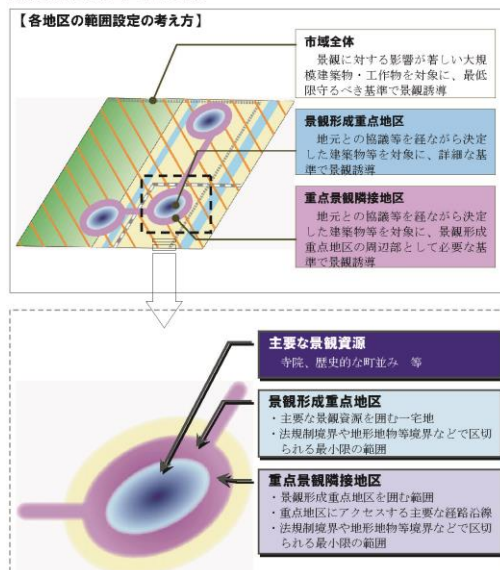
#### 3. 美しい景観によって、市民の誇りと愛着を育みます。

・市民が郷土の美しい景観に触れ、景観づくりに参加する取り組みを通して、市民の高岡市に対する愛着と誇りを育みます。

#### 4. 魅力ある景観づくりをとおして、まちを活性化します。

・美しい景観づくりを進めることによって、まちの魅力が高まり、高岡市を訪れる人々が増え、地域社会の活性化を目指します。

### 景観形成重点地区等の設定



91  
図：景観づくりの基本方針及び景観形成重点地区等の設定

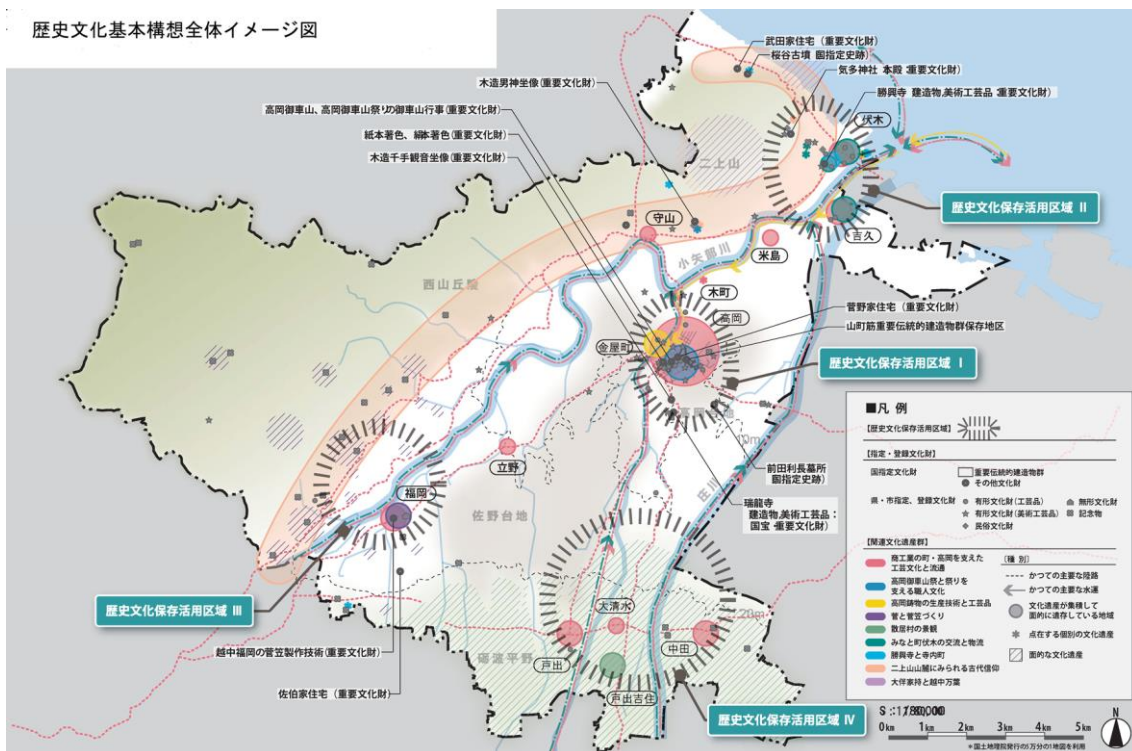
#### (4) 高岡市歴史文化基本構想

策定：平成23年（2011）3月

平成20年度から文化庁の委託を受けて「高岡市文化財総合的把握モデル事業」を実施し、高岡市歴史文化基本構想を策定した。

本構想では、将来像を「市民が郷土に対する誇りを持ち、ものづくりの結晶が輝くまちへ」とし、基本方針を、“文化財の保存・活用を通して”  
 〈1 郷土教育を推進し、市の歴史や風土を学びとる。〉〈2 ものづくり文化の洗練を目指す。〉〈3 市民一人ひとりが高岡の「人・ものづくり・文化」を担っている意識を高める。〉とし、文化財の保存・活用の方針や人材育成の方針、文化財の周辺環境に係わる関連分野における施策の方針などを定めている。

なお、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律の運用指針」によれば、「歴史的風致維持向上計画」作成の際には、あらかじめ「歴史文化基本構想」を策定し、それを踏まえた「歴史的風致維持向上計画」とするよう努めることが望ましいとされており、本市の歴史的風致維持向上計画（高岡市歴史まちづくり計画）の作成にあたって、その内容は本構想に即したものとした。



図：歴史文化保存活用区域案

#### (5) 越中・飛騨観光圏整備計画

策定：平成22年（2010）2月

計画期間：平成22年度～平成26年度

本計画では、2県8市1村（富山県高岡市、射水市、氷見市、砺波市、小矢部市、南砺市及び岐阜県高山市、飛騨市、白川村）の区域において、「ものづくり、景観、食、祭り・歴史、温泉」といった「5つのキーワード」を掲げている。

当圏域ならではの強みであるこれらの豊富な観光資源を活かし、〈いつ、誰が、どこに訪れても、2泊3日以上楽しむことができる圏域の志向〉〈人材育成と情報発信を核とした全国・世界へのPR〉を通し、「～越中・飛騨観光圏整備による地域の活性化～」を図っていくこととしている。

#### (6) 高岡市中心市街地活性化基本計画

認定：平成19年（2007）11月

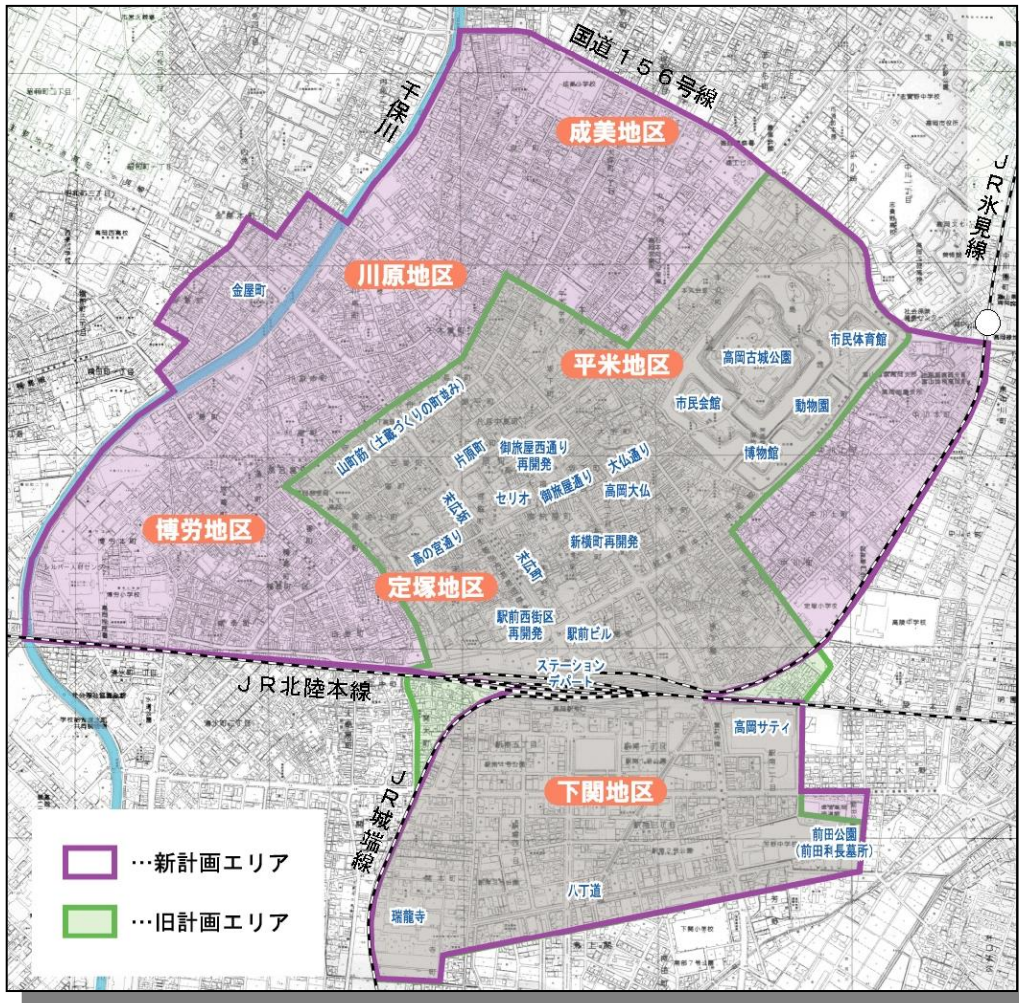
計画期間：平成19年度～平成23年度（第1期）

平成24年度～平成28年度（第2期）

平成29年度～平成33年度（第3期）

本計画では、『光り輝くまちなかの創生 ～400年の資産を守り、育み、繋ぐ～』のスローガンの下、「①行き交う人で賑わうまち」「②住む人、働く人で賑わうまち」を基本方針としている。

また、基本計画の目標を「1 交流人口の拡大」「2 まちなか居住と生活サービス・事業創出機能の充実」と定め、中心市街地に集積している貴重な歴史・文化資産を保存・継承し、観光資源として活用することによって、交流人口の拡大、及びまちなか居住人口の増加を推進することとしている。



図：計画区域（エリア）

### (7) 文化創造都市高岡推進ビジョン

策定：平成 27 年（2015）3 月

本計画は、文化創造都市高岡として目指すべき都市のイメージを明らかにするとともに、その実現に向け、文化、芸術、産業、観光等に関する施策を一体的に推進するため、概ね 10 年間の基本的な指針を提示した。

また、4つの戦略〈1.知る〉市民一人ひとりが高岡の文化を知り、文化に親しむ機会の拡大、〈2.創る〉地域固有の文化に親しみ、交流を生み出す「創造の場」の形成、〈3.つなげる〉分野を超えた交流の創出と産業など他分野の活性化、〈4.伝える〉メディア戦略等による高岡の認知度向上とブランド形成、を推進することとし、重要伝統的建造物群保存地区をはじめとした高岡の多様な文化資源を活かした取り組みを図ることで、目指す都市イメージ「Art & Craft City 高岡」の実現に繋げることとしている。

このような高岡の文化力を活かした文化創造都市高岡の推進は高岡が魅力ある都市として存在感を高め、活性化を図ることにつながるものである。

#### 4 高岡の歴史的風致の維持及び向上に関する方針

- ①歴史的風致に息づく歴史と伝統を反映した工芸技術及び地域固有の祭礼・年中行事の継承と育成
- ②歴史的風致の核となる歴史的建造物の積極的な保存と活用
- ③歴史的風致を形成する歴史的な町並みの保全と周辺環境の調和

##### ①歴史的風致に息づく歴史と伝統を反映した工芸技術及び地域固有の祭礼・年中行事の継承と育成

工芸・民俗技術に関しては、現在の取り組み（※）を今後も支援し、又は継続していくとともに、『地域の幅広い伝統産業を継承し、一層発展させることのできる人材の育成』を標榜する富山大学芸術文化学部と連携し、伝統的な工芸技術に裏打ちされた新たなデザイン、現代の人々の価値観や生活様式に合うものづくりを促進し、担い手の育成を図る。

また、高岡鋳物発祥の地である金屋町等では、空き家や空き倉庫を活用し、伝統産業を受け継ぐ若手作家に工房として提供するなど、場の提供も将来的に検討する。

祭礼・年中行事に関しては、祭礼道具などの修理に対する支援とともに、博物館等の拠点施設の機能強化や関連展示・交流施設の整備等を推進し、資料の収集・保存及び調査・研究を通して体系的な記録保存を図る。

さらには、工芸技術、民俗技術や祭礼・年中行事の現状と課題、取り組み内容について、普及と啓発に努めていく。

##### ②歴史的風致の核となる歴史的建造物の積極的な保存と活用

指定文化財については、引き続きその保存と活用を推進する。また、国の登録有形文化財についても、その保存・活用を図るとともに、その公開にも努めていく。

これらの文化財は、必要に応じて歴史的風致形成建造物の指定を行い、その修理や整備に努める。

その他の歴史的建造物については、悉皆調査や発掘調査等の継続的な基礎調査を行い、その全容を明らかにするとともに、特に保存の措置が必要なものについては、史料調査と研究を行い、明らかとなった価値を再評価し、必要な法令に基づく保護措置を図る。

### ③歴史的風致を形成する歴史的な町並みの保全と周辺環境の調和

歴史的な町並みの保全とは、「都市構造の歴史的な価値を尊重し、その機能を保持しつつ、適切な介入をおこなうことによって現代に適合するように再生、強化、改善すること」と捉えることができる。

したがって、町家等が今も良く残る高岡の歴史的な町並みにおいては、資料の収集・保存及び調査・研究を踏まえ、町並みの連続性や物語性を維持するため、市の諸計画に基づく事業と連動しながら、町家等を工房や店舗、一時滞在施設等、高岡の魅力を向上させる観光資源として活用を促進するなど、その保全に取り組むとともに、将来的には新たな助成支援や借り上げ、買い取りも検討する。

また、景観計画に基づく規制誘導や、屋外広告物規制の強化による良好な景観の形成を推進するとともに、特に町並み保全型のまちづくりを進める地区については、歴史的文脈に沿った整備を心がけ、無電柱化や自動車の流入抑制を行うなど、歴史に触れながら安心して散策できる歩行空間の創出を図る。

#### ※ 工芸技術の継承と育成に関する現在の取り組み

高岡の伝統産業である「高岡銅器」、「高岡漆器」に関する取り組みとして、現在、高岡御車山などの祭屋台を「再生の技」によって修復する目的で、金工・漆工・木工・繊維部門の熟練技術者による「高岡地域文化財等修理協会」が設立されている。

また、高岡市デザイン・工芸センターでは、デザインから造形までトータルな工芸技術の習得を目指す「伝統工芸産業技術者養成スクール（現・次世代ものづくり人材育成事業）」や、高度な技術・技法を保持する育成者と、そのもとの修得し継承しようとする者に対する支援を行う「伝統的工芸品技術・技法継承者育成事業」を実施しており、次代を担う人材の養成に力を注いでいる。

菅笠づくりに関しては、菅笠製作技術保持者への研修師事に必要な経費の助成や菅草栽培に関する助成など、様々な角度から「越中福岡の菅笠製作技術」の保存継承に向けた取り組みを行っている。

一方で、伝統産業の裾野を広げるための教育として、平成18年度から「高岡市ものづくり・デザイン人材育成特区」の認定を受けて、「ものづくり・デザイン科」を市内の小・中・特別支援学校全40校（現・39校）で必修教科とし、子どもたちが工房の見学や調査を行い、その歴史や製作工程、特色等について理解したうえで、漆工芸（青貝塗、彫刻塗、蒔絵等）、鑄造工芸（錫）、彫金、細工（菅、藁等）、各種地域産業（栽培、食品加工等）などを実際に制作するといった内容の授業を続けている。